

り行くを奈何せんや、如何となれば吾人もし衆生物は間斷なく漸々に進歩開發し來るてふ説に循ひて人類の年代を長遠にするならば、其之を長遠にすること愈々大いなるや、其長遠なる歲月の間に人類が目だつ程の進化を爲さざりし事實は如何にも理會す可らざれば也、否な却つて人類の上には幾分の退歩ありしを見らるれば、其不可思議や數層の度を加ふところを謂ふべけれ、

因て今や此の如き極端なる進化説を主張する人々は左の疑問に答へざる可らず、是れ極めて正當なる疑問なりとす、曰く、

「舊石器時代と今日の時代との間に汝が經過せりと爲す其百千萬年の間に若し人類が其最も古き人々も今日の人々と同じく獸類を去ること甚だ遠くして漸々に獸類を去ること遠くなり來りし跡即ち獸相を脱して眞箇の人體と成り來りし跡絶て無くんば、人類が獸類より進化し來りて段段に無數の小歩武を重ねて獸類に遠ざかりゆきしと信すべき如何なる正確なる道理あるや、加之、人

類の歴史時代内に於ける幾百千年の實跡を觀察するも、此の如き進化の證據毫しも有らざるに、論者は何の權あつて斯く間斷なき進歩(進化開發)ありと妄斷するや、

但し太古人の形體上に於ては斯の如くなれども、余輩若し彼等が智力生活及び開化上より論じなば、或は彼等を以て獸類に近き者と見做し得んか、請ふ此點につきても余輩をして事實の如何を尋ね究めしめよ、然らば事實自ら之に答へん、云々、試みにポイド、ドーキンス氏が太古の石器彫刻(象、鹿等の寫生畫等)を評して言へける語を看よ(穴居獵者論)――  
「若し火石の破片を以て彫刀とし、石及び骨を以て彫刻を施す材料とせば、今日の第一流の彫刻家といふとも恐らくは多く之に加ふる能はざらん、」

彼等は多少耕作をも爲せり、云々、之を究むるに、余輩若し初人及び其境遇と今日の人々を比較し、彼等が智量の大小につきて精密なる判断を下さんと欲せば、太古人が今人に於るは獸類が人類に於る如

しと云ふは宜からず、少童が成人に於る如しと云ふを以て至當なりとす』

最後にプファッフ氏は強力なる文字を以て、敵手の既に崩れたてるを追撃して曰く、

『但し人或は言ん、然り、上より下へ降る必須の連鎖は然か確かに缺けたりと雖ども、下より上へ赴く者(即ち獸類より人類に達する者)は則ち在りと、然れども此事の然らざるは進化説を賛成主張する者すらも——若し其臆説の萬々誤謬なきを妄信して眼睛盲するに非れば——容易く承認すべし、古代の沙灘に就て之を検するに、人に近似せる猿の如き者は一として見あたらす、又猿に近似せる人の如き者も見あたらす、今日人類と猿類との間に存する懸隔はテルシヤリ時代に溯りても少しも減する事なし、萬生物の漸變累進説の眞實無妄なるを確信する事非常に厚き者を除くの外は、此一事實を見れば則ち

宇 宙 観

世 界 創 造 説 と 世 界 進 化 説

何人も進化論の維持す可らざるを曉らん、是該論は一物として永住する者あるを許さず、一物として靜止する者あるを許さざれば也、併ながら余等最も人に似たる猿の一種(即ちギツボン)をテルシヤリ時代に發見するに、此猿は今尙同一の劣級に在り、而して之と並びて氷時期の終に人類は已に今日と同じき高等に位るしをりしが、猿は益々人に似る様になり來らず、又人は初人よりも猿に遠ざかる事益す大いに成り來らず、凡そ之を見る人にして正當の推斷を下し得る者は皆謂ん、萬生物の始終不斷に進化して代々變化の増加するてふ彼の理論臆説は事實と衝突して到底維持せらる可らず、如何となれば、斯の如き變遷進化に引かへて、衆多の種類の動植物は却て幾千年が間毫も變遷進化せず依然として存在すれば也、

人と猿との相去る距離の如何に大なるかは是等兩者の頭腦の大きさを表する數字を見れば最も善く了解せらるべし、フヲホト(獨逸の學者)が量定したる所に依れば、猿類の最も大なる者、即ちゴリラは三

十。五。一。立。方。寸。の。腦。を。有。す。然。る。に。頭。腦。の。大。き。さ。に。つ。き。て。は。人。種。中。の。最。下。等。に。位。す。る。濠。洲。土。人。の。最。大。の。頭。腦。に。就。て。之。を。見。る。に。人。腦。の。中。數。は。九。十。九。三。五。立。方。寸。に。達。す。チ。ン。パ。ン。ジ。ー。猿。及。び。猩。猩。の。腦。は。尙。更。小。さ。し。其。牡。に。在。て。は。二。十。五。四。五。よ。り。二。十。七。三。四。立。方。寸。に。過。ぎ。ず。是。に。由。て。觀。れ。ば。最。も。人。に。近。き。猿。類。の。腦。も。最。下。等。人。種。の。腦。の。三。分。ほ。ど。に。も。登。ら。ず。否。な。初。生。兒。の。頭。腦。の。半。分。に。も。及。ば。ざ。る。也。

茲に余等眼を轉じて人と人との間に於ける差を見んとするに、デヅキス氏の言ふ所に依れば、歐洲の最大頭殼の平均數は百十一、九九立方寸、濠洲の最大頭殼の平均數は九十九、三十五、六立方寸なり、然れば是等二者の差(最大と最小を表する)は百十一、九九——九十九、三五、即ち十二、六四立方寸なりとす、然るに濠洲土人とゴリラ猿との間の差は九十九、三五——三十、五一、即ち六十八、八四立方寸なるに非ずや、誰か復人と猿とを同一なる者と主張するを得んや、

是等の數字より判斷すれば、彼の屢々反復せらるゝ説——最高人種

と最低人種との間に於る差は、人と最高猿類との間の差よりも少からずと云ふ説——の價値も鑑定せられ得べし、

人類が獸類より進化し來りしとの説を主張する者は吾人に保證して曰く、斯の如き中間の連鎖(人猿の中間の動物)は、亞細亞に於て發見せらるべしと、然るに亞細亞にては歐洲に見出さるゝが如き石器は發見せらるれども、人類の一層下等なる一層遼遠なる階級を指示する者は何一つとして發見せられざるなり、實に亞細亞を以て人類の起原の地と爲すは此進化論に取りて極めて自語相違の甚だしき者と謂べし、如何となれば歐羅巴また亞細亞に於て「人」といふ名稱を蒙むらさるゝに足るべき動物の未だ起らざる久しき前に、此説の言ふ所に依れば、間斷なき進化は動物界を驅て猿の地位まで進歩せしめたり、故に此説に依れば太古の歐羅巴人は西歐羅巴に於て進化せし者に非ざりしとは信すべき道理ある無し、即ち亞細亞に於てのみ此の如き進化起りて他處には此事なかりしと信すべき道理毫も有る

こと無し、如何となればダーウキン嘗て言はずや、

「天然撰擇(即ち所謂る自然淘汰)の作用は全宇宙に徧く、常に忙がはしくして、有りとも有らゆる有機的生物の上に絶えず變化を起し且つ之を完成しつゝあり」

と、此進化説に循へば、人と猿との間の連鎖たる動物は、歐羅巴に於ても亞細亞に於ても等しく發見せられざる可らず、若し人類が斯く下等動物よりして進化し來りしとすれば是非とも此の如くならざる可らざる也」

宇 宙 觀

余輩之に附記して曰んとす、太古人の道德に於けるや、亦た大いに發達せる者あるが如し、夫の極端なる無神論者バツクルをしてすらも、「道德は發明を容さず」と斷言せしめたるに非ずや、是れ即ち道德の觀念は既に已に上古に於て十分發達したれば、後世の人は最早別に新らしき道

世 界 創 造 説 と 世 界 進 化 説

徳を發明するに餘地なしと言ふ也、文明を以て誇る今日の人が五千年前の十誡に教導せられ、三千年前の箴言に對して一辭をも替くる能はざるの事實に相徴さば、思必ずや半に過ぐる者あらん、

以上絮説し來れる如くなれば、學術の何たるをも未だ究めずして、只管人類は猿の進化したる者のみと得々揚言する如きは、啻に人間の面汚たる而已ならず、亦學術の罪人なりと謂ふ可し、其身體は直接に猿より進化したるには非ざれども、其品性は自ら退化して猿に似んとする者ならざらんや、咄、何たる怪事ぞ！

第十章 哲學的開闢說及び人類起原論

一六

附佛教の成住壞空說等

宇 宙 觀

前章前々章等に縷説し來れる所は專ばら天下の主要なる古傳説(創世記も亦古傳説なれば也)を攻しらべ斫つたる者にして、進化論をば未だ正面より説くことを爲さざりしが、是には抑も故ある事なり、そは他なし、今日の思想界には、或は有神論にもあれ、或は無神論にもあれ、兎に角一種の進化ありたるを認めざる者殆んど絶無なる而已ならず、ヒウズ氏の如きは殊に進化の大法の嘗て或る點まで最も盛んに行なはれたるを十分に信じて、殆んど進化論の勇將チャンピオンなるが如く、星霧臆説より動植進化まで層々次々説き立てたれば、其結

哲學的開闢說及人類起原論

果として、創世記の辯護とともに進化説も亦反面より同じく闡明せられたる也、但し進化論を正面より一瞥する事も必要ならざるに非ず、并は本章の中に於て、其適當なる部分に論及さる可し、是より先きに余輩は茲に預め夫の所謂哲學的若くは學術的開闢論 Philosophical, or scientific cosmology を歴觀せんと欲す、

但し是は只普通の哲學史に就て説を爲せる者なるが、ドイセン博士の主張する如く、實は哲學史は宗教史と分離すべからざる者にして、各種の宗教的開闢談は皆是れ太古人の世界觀を具體的に言ひ顯はしたる者なりとす、從來の哲學史家がタレスは全たく神の手を借ざる自然的開闢説を主張したればとて、之を哲學史の筆頭に置ける

一七

宇 宙 觀

如きは、淺慮の失と謂はざる可からず、例へば前章に掲げたるバビロニアの古傳に於る如し、該傳は本來只是れ元始に渾沌として大水一面に此世界を掩ひをりし者が遂に相分れて天地となりたるを形容したる者とす、即ち滔々たる大水を海洋神（ウタノカミ）としてムムチアマット（ムムチアマト）と名け、天地剖分の力をベルと名けたる者のみ、前者は滔水の義、後者は主宰者の義なれば也、只後世の俗人殷々と迷信に流れ陥りたる而已、希臘の哲人タレスが水を以て萬物の根本と唱へたる者に之を比せば、却つて優るありとも、決して劣る事は無かるべし、要するにタレスも亦其説を此種の古傳に稽へ得たる者とす、我が神典なる天之御中主命、國常立尊、伊弉那岐、伊弉那美兩神の如きも、亦皆一種の

哲 學 的 開 關 說 及 人 類 起 原 論

宇宙觀より出で來りたる者のみ、然れば諸國に於る神代記、神仙話等の古典は皆其藏する意味深長なる者とす、試みに尙二三の古傳を參觀せよ、  
 夫の有名なる亞細亞の古國、フキニシア（文字の母貿易の母と從來稱せられ來れる名譽の國）の古傳には云ふ、天地の初には黑暗の空氣運動して無名渾沌の體を爲したりしが、靈神之と合して泥質を生じ、是よりして宇宙萬物の種子開發し來れり、又希臘の神仙傳に曰く、元始には宇宙萬物は只一の混沌體にして暗黒の夜に包まれをり、溟滓として其中に萬物の種子を混藏したりしが、此混沌體の中よりして天地の材質化生し來り、エロス（愛情の神）之を以て萬物を造化し完成して今日の美觀あるを致さしめたりと、又羅馬の詩人オビダ

宇 宙 觀

ス其有名なる詩、メタモルフチセス、即ち化生說第一篇の初に此事を述べて云く、海も無く、地も無く、萬物を覆ふ天も無し、前には、萬有の形は唯一にして、雞子の如くなりき、之をカオス(渾沌)と名く、是只一團の粗硬不熟物にして、何も観る可き者なく、紛亂混雜の中に萬物の種子を藏めたり、……而して諸分子互に相軋轢し、一物一體の内に於て寒は熱に敵し、濕へるは乾るに逆ひ、柔なるは剛と闘かへり、爰に造物この争鬪を止め、乃ち天より地を切はなし、地より海を斷ち、密雲より滴る水を分てり、云々と、又印度の古典維陀ウヱダには曰く、天地未だ在らざりし始には、日夜も無く、明暗も無く、老幼も無く、生死も無く、只「一」といふ物ありしのみ、此「一」は氣息なくして呼吸せり、之を萬物の本

論原起類人び及說關開的學哲

源とす、然るに忽然熱氣發動して一箇の萌芽を生じ來れり、是即ち愛の情と稱ふる者にて、萬物は是より孵化生々して止む時なしと、此の最後の開關談の如きは、實に印度哲學の種子なりき、但し支那の古傳は既に説きたれば、今は直ちに其哲學を一瞥せんに、疑も無く支那哲學は所謂河圖洛書より割出したる易學なりとす、傳へ曰ふ、伏羲氏天下に王たる時身長八尺以上の巨馬(所謂龍馬)ありて、滎河に出でたりと云ふ、其背に旋毛の圈まきくして、星辰の列なれる如き者あり、伏羲氏乃ち其圖を受けて、遂に八卦を畫けり、之を伏羲易と號す、河圖の圈象を按ずるに、一と六は北に位りし、二と七とは南に位りし、三と八は東に位りし、四と九とは西に位りし、

宇 宙 觀

五と十は相守つて中に位ゐず、邵子曰く、圓者星也、曆紀之數其肇於此乎と、是れ河圖は圓を特色とすれば也、又禹治水に勞せる時洛水中より神龜其背に坼文ある字畫の如き者を載せて出で來れり、其字畫に似たればとて之を書と名く、神禹之を第でて九類所謂洪範九疇是也を組成せり、曰く五行、五事、八政、五紀、皇極、三德、稽疑、庶長、福極是なり、邵子曰く方者土也、井田之法其倣於此乎と、是れ洛書は方四角を本色とすれば也、

此二圖書は實に支那哲學の根本なるが如し、故に孔子の語と稱する繫辭易の大傳に曰く、河出圖、洛出書、聖人則之と、則之とは即ち此等の形象に循ひて萬物生々變化の妙理を曉り以て人生觀若くは世界觀を形成したるを謂ふ者に

哲學的開關說及人種類起原論

て、換言すれば、則ち哲學茲に生じたる也、而して哲學とは易(Changes, Permutations)是なり、故に易經の繫辭第十一章には明言すらく、

『易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、』

是れ支那哲學者の開關說なり、說者曰く、河圖が五と十とを虚にするは太極にして、奇偶の數二十なるは兩儀なり、且一二三四を以て六七八九と爲るは四象に外ならず、洛書に於ても亦然り、其中を虚にするは則ち太極のみ、云々、斯く支那上古の哲學者輩は己れが想像し按出し得たる一切の事理を悉く河圖洛書に歸して、其說を神にせり、按ずるに太極とはハナハダ、キハマルにて、物無以加焉之稱也とは、眞に宜きを得たる定義なり、又無稱之稱と稱す、



宇 宙 觀

兩儀とは陰陽なり、男女の兩元儀を然か名けたり、彼等は一切の事物に此陰陽を適用せざる無し、今其二三の應用を示さん、例へば一氣の流行を陽と爲し、一氣の牧斂を陰と爲し、長進爲陽、消退爲陰、温熱爲陽、涼寒爲陰、品物之生長爲陽、收藏爲陰、春夏爲陽、秋冬爲陰、木火爲陽、金水爲陰、晝爲陽、夜爲陰、男爲陽、女爲陰、明爲陽、暗爲陰、生爲陽、死爲陰、剛爲陽、柔爲陰、仁爲陽、義爲陰、等大凡斯の如し、兩儀を又一に二儀と稱す、路史に曰く、之を二儀と曰はずして兩儀と曰ふは甲乙なきを示す也と、

四象とは何ぞや、曰く少陽（春に當る、即ち陽中之陰とす）、太陽（夏に當る、即ち陽中之陽とす）、少陰（秋に當る、即ち陰中之陰とす）、太陰（冬に當る、即ち陰中之陽とす）、是れなり、

但し易は一面哲學たると同時に、一面はまた卜筮の書た

哲學的開關說及人類起原論

りき、彼の殷の亡臣箕子が其朝鮮王たるの身を以て武王の爲に來り講じたりと稱する洪範九疇（上を）の如きも、河圖洛書に本づける易より出でたれども、亦日常の占筮も同じく易より出でたりき、而して其易は文王の手にて幾分か變更改易せられて今日に至りぬ、因て今の易を周易と名く、是れ文王が殷の亡び周の興らん瑞相を易象の上（上を）に寓したる所爲ならんと邪推する人々なきに非ず、我が新井守村氏の如きは確かに其一人にてありき、

（註）著者嘗て上毛に遊學せる時、該地に新井守村翁とて國學の大家あり、伏羲は我が大國主神なりて、ふ奇代なる臆斷の下に種々伏羲氏の事迹を考索し、夫の河圖に數べ至るや、忽ち文王の奸策を看破りたりと揚言し、遂に「復古八卦方位辨」と題する二卷の書を著はせり、大國

主云々は例の國學者たる僻論なれども、周易と古易との間に大逕庭あるを説ける處は多少觀るべき者なきに非ず、翁の曰く、  
 『偕又文王八卦圖といふあり、此の方位は、拾芥抄、下學集に見えたるが如し、震を東に、離を南に、坎を北にするたるはよし、其の外は皆いかにぞや、つらく考ふるに、こは實に、姫昌が作りかへたる偽方位にて、他のまうけたるにはあらじかし、かくいふを、いぶかしみ思はむ人のあるべければ、我思ひとれるよしをいさゝかいはむ、漢籍史記といふを覗きたるに、自以爲獲水德之瑞、更名河曰德水、而正以十月、色上黑とあり、註に漢書音義曰、五行相勝、泰以周爲火、用水勝也、と見えたり、こゝより、おして按ふに、殷を艮の卦として、周乾の卦を用ゐて、勝るなるべし、正するに十一月を以てせるも同じさまなり、つらく按ふに、國を傾けむに、さる咒詛せるにこそありけめ、まして姫昌は、人のまねをせるさかしら人なりければ、殷をほろぼさむの下心を人にさとられじと、深く心を用ゐて、まづ筮法を改めて、人を威し、それより字書に、坤は從

土申とある申の字を、未申の申なり、とやときなして、此卦を西南におきかへ、さておのが心のままに、萬物をたわむるは、風より疾はなし、といふ功德ある巽の卦をわが子發にたぐへて、辰巳にするて、われにあひむかはせ、など方位を直せるなるべし、心あらむ人は考へ見てよ、  
 『偕大衍は盈衍と見るべき者なること、言ふも更なれば、其數五十有五になむ、——伏羲聖人のせさせたる占法もがないか、とおもふにつけて考ふるに、説卦傳に、昔者聖人之作易也、幽贊於神明而生蓍、參天兩地而倚數、とあり、此は數こそあらはに見えね、參天兩地の四字に心をとめ、河圖に心をやりて見るに、九が用數の極なれば、此を參天にせむには、三九二十七なり、兩地にせむには、二九十八にて參天兩地の數を合すれば四十五、すなはち八節の一節のなり、されば是れを著の用數とぞ思ふ、參天兩地の註を見るに、參は奇也、兩は耦也、七九陽數、六八陰數とあり、此は參天兩地の註なりとは、さらにきこえざるなり、つらく按ふに、文義を解し兼つゝも強て註せる故なるべし、この

參天兩地は伏羲神聖の正しき占法をしるべき妙文なれば、かの偽筮法に欺れ居たる人たちの辨へ兼ねむ事はうべなり。

宇 宙 觀

然し併ら此の太極説は啻に易の本文に見えざる而已ならず、所謂黃老學派中には採用せられざりしと見ゆ、儒家伏羲を祖述したれば、道家は黃帝を祖述したる也、道術家養生家、煉金家等總て黃帝を祖とす、

之を要するに、道家者流或は黃老の徒は百尺之竿頭更に、一步を進めたる者とす、即ち彼等は『道』といふ者を太極の上上に立て、之を盛んに尊重祇敬す、故に莊子曰く、(大宗師)

『夫道……無爲無形可傳、而不可受、自本自根、未有天地、自古以固存……生天生地、在太極之先、而不爲高、在六極(六)之下、而不爲深、先天地生、而不爲久、長於上古、

而不爲老』

論原起類人び及說關開的學哲

然らば此道は是れ如何なる者ぞ、老子曰く、『人法地、地法天、天法道、道法自然』而して又斯く自然に法とれる道は宇宙に在て如何なる働をなすや、老子又曰く、『道可道、非常道、名可名、非常名、無名、天地之始、有名、萬物之母』又曰く、『道生一、一生二、二生三、三生萬物、萬物負陰、而抱陽』云々、說者曰く、一とは太極なり、二とは天地なり、三とは天才なりと、是其儒家と異なる所なり、如何となれば易經には太極を以て至極の妙境となし、天地萬物これより生ずと唱れば也、而して道といふ者をば却つて之を陰陽の働に籠めたりたり、易に曰く、一陰一陽之謂道と、果して然らば陰陽を離れて別に道なきが如し、程子も亦曰く、離了陰陽、更無道、所以陰

陽者<sup>スル</sup>是道也<sup>ナリ</sup>と、是れ陰陽の迭ひに運る其理を道と稱したる者に似たり、

列子は黄老の徒と稱す、其開闢説は本書第五章に掲げた路史中にも粗論及したる所なるが、是も全く自然を尙とびて、有生、不生、有化、不化（能生者は生せず、能化者は化せずの義）不生故能生生、不化故能化化と唱へたれども、其自然開闢の步履としては實に左の如く之が進行期を區劃せり、天瑞篇に云く、

『子列子曰、昔者聖人因陰陽以統天地、夫形ある者は無形より生ず、云々、故に曰ふ、元始に太易あり、太初あり、太始あり、太素あり、太易は未だ氣を見はさぬ也、太初は氣の初なり、太始は形の初なり、太素は質の始なり、氣と形と質と具はりて未だ相離れざる、之を渾淪（混沌）と曰ふ、渾淪

宇 宙 觀

論原起類人び及說關開的學哲

とは萬物相渾淪して未だ相離れざるを言ふ也、視れども見えず、聽けども聞えず、索むれども得ず、故に太易と曰ふ、太易は形迹（兆朕）なし、太易變じて一と爲り、一變じて七と爲り、七變じて九と爲る者とす、九變は究極なり、乃ち復變じて一となる、一は形變の始なれば也、斯くて清輕たる者は上りて天と爲り、濁重なる者は下りて地と爲り、沖和の氣ある者は人と爲れり、故に曰ふ天地精（陰陽）を合せ、萬物化々生々す、

按ずるに、列子は老莊と稍異にして、特に唯物的臭味を有せる者に似たり、只彼も支那人なれば、陰陽四象五行等の數目には依然支配せられてありき、如何となれば、『太易變而爲一』の『一』は即ち太極に相當し、七は陰陽五行を表し、

宇 宙 觀

九は即ち變化の究極(九と究音相通す)にして、再び最初の一に復するを示す者なれば也。斯の如く無は初め有を生じ、有は竟に無に歸り、純然環の端なきが無けん、是亦一種の進化説なり、淮南子は此種の進化を化醇と名けたり、易經に所謂萬物化醇(四章を)即ち是なり、思ふに支那の哲學は妙に進化的唯物的、一元的なる者なりき、是また支那人の思想の夙に大發達を爲したる明證とや謂つ可けん、堯舜を始として列聖列賢皆常に天帝上帝、神明、造物者等の語は用ひたれども、天地の開闢を説くに方りてや、妙に唯物的化醇主義の臭味を帶べり、易に所謂太極生兩儀説の如きも、從來正統派の儒家は飽までも唯物的一元的に之を解釋せんと務めたり、例へば天や上

帝や后帝や上天を大いに重んずる田中允澤氏の如きすらも、實に左の語を成したるを見る也、

『夫天地之間唯一元氣、而陰陽者是流行之氣也、萬化品類莫不由此氣而生者、有此氣則存焉、無此氣則亡焉』云々、

哲學的開闢說及人種類起原論

是れ畢竟夫の陰陽に兩分して働く所の一元氣てふ者を實際萬能視したる者に非ずして何ぞや、彼等は一陰一陽之謂道なればとて、陰陽の外絶て復道てふ者なしとさへも斷言するを躊躇せざる也、是れ道をさへ物質化せんと試むる者のみ！道豈氣ならんや、請ふ試みに淮南王が『道の功德を頌讚したる辭を、一瞥せよ、』夫道者覆天載地、廓四方、坳八極、(八方之極)高不可際、深不可測、包裹天地、稟授無形、××

×××故植之而塞于天地、橫之而彌于四海、施之無窮而無所朝夕(盛衰)、舒之滿於六合、卷之不盈於一握、約而能張、幽而能明、弱而能強、柔而能剛、橫四維而含陰陽、絃宇宙而章三光、(日月)×××山以之高、淵以之深、獸以之走、鳥以之飛、日月以之明、星辰以之行、云々、抑も道は斯の如く至大至高至妙至微なる者なれば、老莊二哲の如きは之を太一の上に位るせしめて、以て之を神妙にす、是に於て乎宋代の儒家(程朱)遂に理氣の説を唱道して、其哲學を高尙にせり、而して开は重に周茂叔の太極説より涌き出し來りぬ、周子曰く、『無極而太極、太極動而生陽、動極而靜、靜而生陰、靜極復動、一動一靜、互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉』云々、朱子之を釋いて曰く、太極者象數未形而其理已具之稱、又曰く、未有天地

之先、畢竟是先有此理、又曰く、無極者只是說這道理、當初元無一物、只是有此理而已、又曰く、太極者本然之妙也、動靜者所乘之機也、太極者形而上之道也、陰陽者形而下之器也、云々、是即ち夫の有名なる宋儒理氣の説なり、而して是れ固より老莊の説を參酌して達し得たる哲學なり、佛説も亦參考に供せられたりと見ゆ、正統派若くは守舊派の儒士は從來此の理氣説を辨駁するに甚だ勗めたり、例へば江都(江)の近藤氏、浪華(大)の田中氏の如き、其論じて尤も明快なる者なり、各々其奉ずる所に忠なること遠く専門の鴻儒に勝れり、

第十一章 問題承前

宇 宙 觀

余輩は前章に於て我が國の正統儒家近藤田中二士に論及したりしが、二氏の心事は頗る憫察すべき者あるが故に、今茲に其定論辨義の一斑を紹介して、其志を今日にまで貫徹せしめ、併せて同時に兩造の主張を一目に瞭然たらしめんと欲す、近藤舜政曰く、

『濂溪先生(子周)太極圖說云、太極動而生陽、動極而靜、靜而生陰、解(註)曰、太極者本然之妙也、動靜者所乘之機也、朱子以太極為能乘之理、以動靜為所乘之機、然動靜者則太極之妙用也、太極者則動靜之本體也、體以起用、攝用歸體、渾然一太極而已、故談體則渾然無朕兆、無有形象、動靜云乎、

論原起類人び及説關開的學哲

哉、陰陽云乎哉、談用則一動一靜、一陰一陽、流行不已、生生無窮、無而有、有而無、所以為妙也、凡物有體而無用者有之哉、有用而無體者有之哉、用常依體而發焉、體常依用而立焉、是一定之理也、然則體用豈為二物哉、物有兩箇而後可論能乘之者與所乘之者也、除用之外別無體、除體之外別無用、焉分別能乘之者與所乘之者哉、理氣本是一物、體用異名耳、理之外別無氣、氣之外別無理矣、喻之如人之乘於舟車也、人與舟車本是判然二物、而後可辨能乘之人與所乘之舟車也、若夫舟車與人本是一物、則何以分哉、以舟車謂之、則舟與車者能乘之者也、水與地者所乘之者也、舟與水、車與地亦是判然二物、而後可辨能乘之者與所乘之者也、未有體用為二物、而體則立於此、用則別行於彼也、全體

是用全用是體其當於動靜也太極全動靜矣其到於渾然也動靜全太極矣猶水波不相離也其當於起滅不定也全水是水波其到於湛然不動不靜也全波是水波之外無水水之外無波矣動靜無端陰陽無始於茲乎思過半焉學者請玩味之○上繫辭傳第五章云一陰一陽之謂道註曰陰陽迭運者氣也其理則所謂道朱子意謂陰陽之外別有箇一物而爲之主宰使其運行以爲如世之主人與從者然雖然氣之外別無箇主宰道之外別無箇陰陽向之如言全體是用全用是體陰陽全道矣道全陰陽矣或問如吾子言陰陽全道則陰陽著明無難見事是義何如答曰陰陽著明雖無難見事然其可得而見焉者則道之用耳非道之本體也渾然不可得而名焉不可得而思焉者是道之本體也雖體

用無二而唯偏見其用而不知體則不全也體用兼明而後可謂之全也是以於其一端也夫婦之愚亦可以與知焉及其至也孔門英賢猶有所難焉

田中氏は又之と稍攻撃の方面を異にして更に詳密なる者あり今之を抄略し和譯して左に掲載せん

『宋儒の學は理と氣とを剖ち體と用とを立て理を以て體と爲し先と爲し道と爲し氣を以て用と爲し後と爲し器と爲せり要するに周子の所謂る太極を以て天地の大原と爲し萬物の道理と爲すのみ易經に説ける如く陰陽を以て道と爲さず却つて老莊の所謂る虛無無形の理を以て之が道と爲さんとする而已然れども易傳には一陰一陽及び陰與陽を以て天の道と爲せり更



に陰陽非道の言なきを奈何せん乎、抑も天地の間には唯一つの元氣あるのみにして、陰陽は是れ氣の流行する者を謂ふ也、萬品群類總て此氣に由らずして生ずる者なし、此氣あれば存し、此氣なければ亡ぶ、故に無先氣之理也、較然著明矣、蓋し一氣即ち陰となり陽となりて萬物を生ずる者、是れ天道の全體なり、故に一陰一陽之謂道、と説かれたり、其義豈明瞭ならざる耶、×××××夫れ天には陰陽の道ありて、而して陰陽には然る所以之理なき也、然るに朱子は大學或問に説て曰く、必有此理而後有此氣と、又易本義には朱子曰く、陰陽迭運者氣也、其理則所謂道と、果して此の如くんば、是れ其所以爲道者は陰陽の上に位ゐして、天にも非ず、地にも非ず、又

聖人の道にも非る也、×××××按ずるに、經書には固より天命の已ざる所以を説けり、然れども未だ嘗て天地混沌開闢等の件々や、形氣已前の理などを説かず、聖人敢て之を言はざるは何ぞや、斷じて此理なければ也、易の象に曰く、天地之道恒久而不已也、日月得天而能久照、四時變化而能久成、觀其所恒而天地萬物之情可見矣、繫辭曰、天地之大德曰生、又曰生生之曰易、夫浩浩六合無窮、無窮則不可測其始也、不可測其始、則不可極其終也、晝在乎上、夜在乎下、此春彼秋、變化無端、陰陽無始、是以悠久無疆矣、以夫太極二字爲天地混沌開闢之説、其謬也、出於莊子之言云々、

今退いて熟ら考がふるに、右二氏が其眞義を得たりと主

張せる易傳太極說の如きは是れ確かに一種の常識的、若くは幼稚的一元論 (common sense, or, naive monism) たるなり、此事は余輩嘗て既に他所に吐露したる事ありしが、夫のポール、ケークラス Paul Carus 博士——米國に在て佛教臭味の一元論を主唱しつゝある學者——の如きは誤りて、却つて朱晦庵等の理氣説を支那の一元論と呼び倣せり、然れども其實易經の太極説は一種の唯物的一元論にして、宋儒の理氣説は即ち此太極を理と氣との二物に分割いたる准二元的哲學なりとす、故に朱子曰く、太極は本然之理、形而上之道也、陰陽動靜之用、形而下之器也、如何なる矛盾若くは詭辯は有るにもせよ、兎に角既に無形の理と有質の氣とを相分ちたる以上は、多少二元に近づきたる

者と謂はざる可らず、而して此の區別は全く老莊列關等諸子の玄談より影響せられたる者にして、亦是れ哲學進歩上に於ける自然の順序なりとす、然れば從陰陽處看則所謂太極、只是在陰陽裏、而今人說陰陽上面別有、一箇無形無影底、是太極非也、など云ふは、恰も耳を掩ふて鈴を盜むが如し、誰か復首肯せんや、之に反して老子莊子等は公々然と揚言して、玄妙極まれる道てふ者を太一の上に安立せり、黃老の方に列子ありて、萬物化生の步履を講ぜる如く、周子は亦兩儀(陰陽或天地)立ての後に於る生々の狀を説て曰く、『陽變じ陰合して水火木金土を生ず、五氣(五行の氣)順布し、四時茲に行なはれ、太極の眞理と二氣(陰陽)五行(水火木金土)妙合して凝結し、乾道は男を成し、坤道は女を成す、二氣交感し

て萬物を化生し、萬物生々して、變化窮り無し、惟人は其秀を得て最も靈なる者』云々、

是れ哲學的開闢說なり、而して専ら是れ自然進化的なる者とす、故に造化創造と言はずして、單に化醇化生と稱す、化醇は今の所謂進化なること既に上に説ける如し(五十九頁を見)、易に曰く、天地絪縕、萬物化醇、また曰く、男女構精、群類化生、是豈純然たる進化說に非ずや、

今之を泰西の哲學史に稽ふるに、バルメニデス等が唱へたるエレア派の太一哲學は、其太一を主張せる點だけは、全く易の太極(太極は又一に太一と稱す)哲學と其趣を同じうす、換言すれば、共に一元哲學なりとす、且其雙方共に、一箇の圓圈を描きて其太一を形容したるこそ奇妙なりけれ、是れ亦佛

宇 宙 觀

哲 學 的 開 闢 說 及 人 類 起 原 論

教者が『圓相』といふ者を書きて道の極意を示せると一般なり、何等の妙合ぞよ！而して又宋儒が遂に理氣の説を肇めたるは、彼に在てアナクサゴラス、エンペドクレスの徒が宇宙に於る生々變化の秩然整然たるを説明せんと欲して、物質外に靈力の存在するを主張せしに彷彿たりと謂ふ可き也、之を一層近くすれば、又下古に於てスピノザが純然たる一元論を主唱したるに次で、デカルトがアナクサゴラス輩と同一の理由を以て准二元論の旗を揚げたるに酷似せり、今日學者がヘッケルに再燃し始めし唯物的進化的一元説を以て天地萬物の創起及び變遷を説明せんと試みつゝあるは、畢竟該バルメニデス兼スピノザ的哲學の自然發達と言ふべき而已(拙著一元哲學第、然四五章を見よ)

れば余輩今茲に支那の太極的開闢論を掲げたるや、天下の一元的進化的開闢説を悉皆總括して擧げ示せると同一の結果を有す、利便何物か之に若かんや、只此等上古の哲學は未だラマルクの星霧(星雲とも名く)臆説 nebular hypothesis に接せざりしが故に、多くは只此世界の永遠悠久なることを推斷せる者の如し、却つて宗教に於ては初より世界の遂に終滅せんことを信じをれり、斯く基督教にては『世界の終極』、『世末』等の語を屢々使用せる而已ならず、基督の如きは明言して曰く、『天地(宇宙或は世界の義なること)は壞廢(上に既に言ひおける如し)ん、然ど吾が言は壞廢じ』と、

(註) 儒家が此世界の永遠無極なるべきを信じたることは、例の田中氏非常の雄辯を振ひて之を説き立てたり、曰く——

或問焉曰、萬物資諸天地生、已生者必死、天地安有無始終乎、曰、天地之間無先有之無先氣之理矣、是故雖一艸一木煙霞埃塵莫不依乎形氣而生者、彼儒所謂天地生於無生於理之説、豈非盲見哉、蓋由宇宙之無窮、觀之推于百億萬年之前、未足爲始焉、推于百億萬年之後、胡足爲終焉、夫生也者、天地之本體也、易也者、萬物之終始也、抑天地生而不已、萬物來而不已、則天地雖大、萬物雖小、不能有倚疊以措之、是故生生之曰易、其義粲然明矣、嚴冬迎春往、盛夏待秋退、新果熟而古葉墮、子孫生而父祖沒、雨霽雲不斷、川流水不盡、大傳曰、天地設位而易行乎其中矣、成性存存道義之門、蓋天地萬物、往古來今、千億萬億、猶見今日、夫豈可以何日爲始、以何歲爲終乎、今夫四時變化而如環之無端、是天地之終始也、且予因先儒之臆説、而試論之、彼所謂自天地開闢而來至數萬歲、雖然、日月不錯行、寒暑不失時、春花以春開、秋菊以秋芳、千年之松樹、一日之槿花、不改榮枯脩短、始背兒齒非古有、今無焉、由是觀之、天地萬古無盛衰老少之變也、無變則恒久也、斯豈非無始終之驗哉、若夫人物草木、及形化氣化者、由其既生之初、至

於命數竭時、或隨日、或隨月、年年莫以不變易者、斯豈非生生不已之驗哉、如子之言者、自其變者而觀其不變者、故不能無疑也、如自其不變者而知其變者、則天地與萬物實然偕無盡矣、當今之世、知之者、其誰也、

宇 宙 觀

嗚呼何たる大雄辨ぞよ、然れども誤まれることは今日に於ては殆んど之を指點するの必要なけん、但し佛教の小乗哲學には成住壞空の四劫(時期ニ即チ)を立てて、世界の生滅を説く者あり、曰く、最初には空劫といふ者あり、渾沌無形を以て其狀體とす、之に次ぐを成劫とす、此時には萬物森然として各々形を成す、其次を壞劫と稱す、其劫間は萬物おのおの其形を保つ、即ち今日の如し、最後に来る者を壞劫と云ひて、此時には萬物悉く破壊滅却し、再び最初の空劫と成る也、而して其空劫更に又成劫と

哲學的開闢的說及人類起原論

なりて、相循環すること環の端なきが如けん、是れ上古の太極說若くは太一說に加味するに、下古の星霧臆說を以てしたるが如き者なり、大に觀るべき節々なきに非ず、但既に言へる如く、是は小乗流の哲學說なれば、大乘哲學者は之を破斥して取らず、正に原人論に見えたるが如し、如何となれば、原人論の著者は大乘主義にして、寧ろ不生不滅觀を固く持したれば也、我が友人某氏十數年前嘗て之を論じたる事あり、尙議論の明晰にして、頗る肯綮に中る者ありと思はるゝれば、左に摘録して、該原人論の性質を明かにせんと欲す、是れ一舉にして佛教の大乗一乘顯性觀をも併せ看るべき兩得あれば也、

『此横目直立能く言語し、能く思慮し、巧に器械を製作し、妙に文學を構成』

する者はは何ぞや、是一箇の獸畜なるか、或は一箇の神物なるか、又其名稱は何ぞや、漢士古代の博物學者之に義解を下して曰く是即ち人と名くる者にして裸蟲の長たる也と、今其言を見るに言ふあり、曰く、——羽ある蟲三百六十ありて鳳凰之が長たり、毛ある蟲三百六十ありて麒麟之が長たり、甲ある蟲三百六十ありて神龜之が長たり、鱗ある蟲三百六十ありて蛟龍之が長たり、又裸なる蟲三百六十ありて人類之が長たりと、孔門の見なり、家語を見よ、

此彙類法に依れば此所謂人は只是裸蟲の長たる而已、然りと雖も其裸蟲と稱する者は畢竟は何物ぞや、禮の月令に中央土其蟲裸と説くと雖も、其類得て知る可らず、又其品類を三百六十と定めしは何の觀察に本づける者なるや、是亦得て尋ぬ可らず、是殆ど佛教者が世上の疾病を四大に配して四百四病と定めたと一般にして、妄斷臆計少しも取る可き所なき者ならん歟、是の如き臆斷の妄説は姑く措きて、天下古今の聖賢智者學者の論定せし所を見るに、皆異口同音に人者萬物之靈也と

稱す、即ち泰誓に云く天地者萬物之父母、惟人萬物之靈と、又孝經に云く天地之性人爲貴と、孔安國之を釋て曰く凡生天地之間含氣之類、人最其貴也と、古來天地人を稱して三才或は三極と爲せしも之が爲なりとす、天竺に於ても人類は其初梵天祖公婆羅拘摩神の身體より化出せしと言て、萬物の中に之を推して長と爲す、又天下の學問藝術の淵源たる古昔のギリシヤ國に於ては其聖賢君子等常に「己れを知れ」といふ語(即ち gnothi sauton)を口にせりと傳ふ、此「己を知れ」と云は自己の身分器量を考へ知れといふには非ず、我が此人身は萬物の中にて如何なる者なるや、如何なる關係を之と有し、如何なる地位を之が中間に占むるや、人とは畢竟是れ何物ぞやと觀念思察するを謂ふ也、故に彼國には「己を知れ」と云は何れの處にても有用なりといふ語もありたりき、今日に於ても歐米各國の賢人學士頻りに此「己を知れ」といふ語を稱道して嘖々措かず、凡そ人事を論するの書には必らず此語を以て其題辭と爲す、其論旨の有神たると無神たるとに關はらざる也、彼の有名なる獨逸人シライエ

ルマケル (Schliermacher) の語に云く、地上の萬物は卑きより高きに進み來りし者にて、人類は其頂上に位す、其肉身形骸を語れば、是は地に屬し、其靈性と知覺を語れば、是は靈に屬す、是の如く是は地に對しては靈物たり、靈に對して地物たり、此二者人身に於て相和して一致すと、人身已に是の如し、此身を有する者何ぞ深く自ら考へざる可んや、是其の「己を  
知れ」といふ所以なり、獨逸唯物論者の巨擘たるビヒネル (Buechner) 氏も其著はせる萬物中人類地位論 (Die Stellung des Menschen in der Natur) の題辭に此「己を知れ」といふ語を用ひたり、又かの獨逸學者シライデン (Schleier-  
den) も同題の演說に於て述て曰く如何なる研究を爲すに於ても其研究する所遂に人類の上に歸して其處にて之が結論を得るに非れば決して完全なる能はざる可し、ギリシャ國の古哲プロタゴラスが人類は萬物の尺度なりと説きたりしも誠に故あるなり云々と、實に人類が萬物の長たる事此の如し、佛書にも亦離三惡道得爲人難と言ひ、得此難得之人身とも言て、人類を以て最上の動物と爲す、誠に此世には人類と并

ぶ者なかる可し、尤も身體と力量とを以て相比ぶれば世上には人類よりも勝れるが如き者あり、彼の北溟に住める其廣さ數千里其長さ數萬里の大鯤、水を撃つと三千里に及び扶搖を搏て上ること九萬里に達する南溟の大鵬、一たび羽翼を張れば日月を遮蔽して蝕せしむるの金翅鳥、一たび其身を動かせば大地震動して傾くの大鯨、雲雨に乗じて天地に縦横するの蛟龍、一撃九千里雲氣を絶つ鳳凰等は姑く小説界に留めおくも、尙地上には恐る可き大動物少なからず、即ち一たび吼れば百獸をして震慄せしむるの獅子王、風に嘯き爪牙を磨すれば萬夫も敢て前まざるの猛虎豹、天に漲ざるの洪水其面を搏つとも泰然自若として游泳を縦横にするの河馬、銃丸を豆粒と爲し槍刀を蘆葦と見做すの鱷魚、牛馬を肩にして走るの熊羆、家屋を顛覆するの大象、是皆人類が體力を以て敵すること能はざる所の動物にして、其力量を語れば人類に勝ること實に千々萬々なり、然りと雖も是等諸動物は皆智力十分に備はらずして、之を譬ふるに宛も匹夫の勇一人に敵するが如き者なり、固よ

り人類と拮抗す可きに非ず、夫鳥獲之力能く千鈞を擧ぐるも謀を帷幕之内に運らして勝を千里の外に制するの張良孔明に焉ぞ匹敵するを得ん、佐久間柴田の輩豪勇無雙一騎當千と稱せられしも終に猿面の小冠者を制するを得ざりしに非ずや、抑も動物に尙ふ所は肢體能力の完備すると智力の發達せるとに在り、決して暴力の逞しきを稱せざるなり、彼の長大無比にして身體鐵石の如くなる鱷魚を見よ、能く川上を過る牛馬を呑み、又虎獅を襲ふと雖も、其手能く之が皮を剥ぎて醃皮を製するを得んや、又其身の鱗甲破綻せし時能く其指を以て之を修補することを得るや、ナイル河の漁夫等鐵鑿を以て之を捕ふる時能く其術計を破ることを得るや、却て屢捕獲せられて世人に玩ばれ市上に曝さるるに非ずや、又亞非利加之黑人<sup>ノ</sup>が遊ぶを伺ひて其上に飛乗り、革或は刀を以て之を退治し以て其腹より麝香の類を獲るを思へ、餘も亦然り、獅子は百獸の王と云と雖も、獵師の術計に罹りて徒に咆哮するあり、或は馴伏せられて凱旋者の車を引きし有り、又火を見れば則ち懼れて

曾て之を滅す可きを知らず、大蛇に遭へば則ち怖て遠く逃げ去る、是を以て牧畜者は火を擧て之が來襲を防ぎ、獵夫は頭に捲ける布を振り、大蛇の狀を現して之が爪牙を免かる、獸王の愚も亦笑に堪たり、虎豹熊羆も陷阱に落て徒らに目を怒らせ、鐵柵に閉籠られて空しく齒嚙し、又大象は人の爲に田野を耕すあり、戰鬥に従事する有り、或は人の玩物となりて種々の藝を演ずるあり、即ち彼の有名なるチャリネ一座の米人フレム氏は現に日日夜夜獅子と虎とを其鐵檻の内に指揮し、或は之と戦ひ、或は之と戯むれて衆人の觀に供するに非ずや、亦大象も彼處にありて諸藝を演ず、皆人の知る所なり、其事已に是の如し、人類もし其智力を用ひ機械を製して進む時は猛獸百萬群をなして來り襲ふとも毫末も懼る可き無し、豈唯動物のみならんや、一切の物凡て然り、山嶽は其前に謙り、林木は地に伏し、江河は埋められ、洋海は狭めらる、豈唯有形の物のみならんや、無形の勢力及び天地の道理總て然り、皆是人の爲に看破せられて盡く其用を爲す、電氣、磁氣、重力、壓力、凡て人に服せざるは無し、地



## 宇 宙 觀

球の廣大なるも其奧秘を穩すに處なく、鬼神之が爲に日夜に哭す、豈唯此世界に於ける事のみならんや、彼の蒼蒼たる天空に於ても亦然り、日月の運行遊星の行道究め得て毫厘も違はず、參と昴と肅々として夜行けば、我其帶の如何に結べるかを知る、北辰其處に居て衆星之に向へば、我其七星の紫微宮に懸れる所以を知る、牽牛織女銀河に棹し鵲橋に相見れば、我其河流の情の極り無きを知る、人知の至る所已に是の如く大いにして且廣し、然りと雖も尙此に止まらず、人知豈唯此物質界、佛者の所謂器界に而已限らんや、亦道德界に運動して極まり無し、善惡邪正、仁義禮智、忠信孝道、義務責任等總て道德界に存する者は我盡く之を知る、此道德界に於ては命は鴻毛よりも輕けれども義は泰山よりも重く、熊掌を捨て生命を取りし人も、生命を捨てて仁義を取り、一言を重んずるが爲に甘んじて火に焚き殺され、公益を謀りて我身を犠牲と爲し、眞理の光を輝かさんが爲に悦んで獅子の穴に身を投じ、天地の大道を傳ふるが爲に骨を山野に曝す、其狀態大に物質界に異なる所あるなり、試に大

## 哲 學 的 開 闢 說 及 人 類 起 原 論

伽藍に往きて一切經藏を見よ、其書冊の衆多なる豈只汗牛充棟のみならんや、請ふ英國の書籍館に至りて見よ、其中最も多きは宗教の書ならずや、人類が道德界に運動すること之に因て知らる可し、其智力界に運動する狀は更に述るを要せざるなり、請ふ念ひ見よ諸動物の中何物か之に似たる、何物か之と等しき、彼の蜂蟻の如きは君臣上下の秩序を有するが如しと雖も、是只蠢爾たる微物のみ、何ぞ擧て稱するに足んや、夫人類は是の如く地上萬物の内に於て挺然其頭角を顯はし、之を制御し之を利用して己の福祉を全うす、萬物の靈と稱するも過分に非ざるなり、

儲是の如く人類は周圍の外物と相くらべて漠然自ら萬物の靈と稱すと雖も、未だ人の人たる所以の理を明かにせず、己の何處より來り何處へ往くを知らず、人生の目的の如何を曉らず、人とは畢竟は何物なるやといふに至りては五里霧中にさまよふに彷彿たり、是即ち今日に於ても尙己を知れといふ語の必要なる所以なりとす、然らば即ち如何せば

可ならん乎、パージ氏 (D. Page) の曰く、

「人生の大疑問を解んとせば先萬物の間に占むる人類の地位及萬物に對して有する人類の關係を詳にするを要す、」

是即ち彼のビヒネル氏 が用ひ掲げたる題辭の一にして其言ふ所甚だ善し、是の如くなるが故に當今歐米兩洲の諸學者此法に循ひて人生の疑問を研究し、甲論じ乙駁して其眞解を得んと熱心す、即ち英國にてはダルウキン (Darwin)、ハクスリ (Huxley) 等の諸大家各々書を著はして或は生物種類の由來 (Origin of species) を論じ、或は萬物の中に人類の占むる地位 (Man's place in nature) の如何を論じ、獨逸國 にては上に其名を掲げたる人々を始めとして、シャーフハウゼン (Schafhausen)、オスカル、シミト 等の人々熱心に此事に力を用ひらる、又かの佛國の人類學者カトルフアジ (Quatrefages) 氏の如きも人類論を著はして此疑問を解んと務めらる、其他各國の學者凡て然り、但し是等の諸學者は大抵地上地下に散見する古今の實蹟を觀察試験して其立論の本と爲すが故に、其説く所は

全く此已に成りたる人身の上に止まれり、彼のカトルフアジ 氏の如きは敬神者なりと雖も自ら明言して曰く「我は經驗と觀察とを本として説を爲す、此二者に由らざる事は如何なる高説卓論といふとも肯て用ひず」と、又ビヒネル氏 は「人類は其始何處より來りしや、今何處に居るや、後何處へ往くや」と其著書を三篇に分ちて論辨せしかども、未だ一言も此人身の世界に生出せし原因に論及せず、是經驗と觀察内に其議論を止むればなり、是等の人は人類は何處より來りしやと尋ぬると雖も、其搜索する所は唯生物種類の由て來る所 (Die Entstehung der Arten) に在る而已、シライデン氏 が著はせし同名の書第三十三丁を見よ、

已に是の如くなれば是等の論説は大抵只形體の一方に偏するの傾ありて、未だ正鵠を得ざるの憾なきにも非ず、然りと雖も今此に之を一々論談すること能はざれば姑く措きて、尙人類研究の事を言んに、先人類の此身體は如何に變化し來りたるにもせよ、已に此世に人類といふ者生出したれば、其生出したる所以の理なかる可らず、夫世間百般の事皆

源因ありて起る、然れば人類獨豈偶然に起らんやと、是亦古今の研究する所なり、而して此事の研究に於ては此既に成りし人身を措きて先造化の意衷を伺がふを必要とす、是を以て此の如き事を論ずる書亦世間に少からず、其中支那及び日本に於て最も人の尊信を得たる者は彼の原人論と名くる書是なり、此書は漢土終南山の僧宗密の作にして儒教道教佛教の三説を會通して一致に歸し、之に由て人類の本源を論定せし者なり、其世に行はるゝこと久し、今日我國の佛徒また之を稱揚して金科玉條と爲すと云ふ、

諸人類の學是の如く切要にし其關係する所甚だ重し、故に今之を細かに研究論辨せんとす、然ども其事一日に爲す可きに非ず、是を以て先手始めに此原人論を批評して一舉に儒道佛の三説を會得し、其理非を辨論して眞理を尋んとす、去來是より原人論の大體を掲げ出さん、

(原人論の人類起原説)

原人論とは何の義ぞや、原とは根本を尋ぬるの、意にして此にては人類

の根本を尋ぬるを謂へるなり、然れば是は人類の根本を尋ね究むるの論説といふの意義なりと知る可し、人類の事を研究するの切要なるは具に緒論に辨明したるが如くなれば、是よりは直に原人論の本意を説かんとす、想ふに是を説くには該論の著者が其自序中に説明したる言語を此に掲載するに如く者は無る可し、因て之を左に掲ぐ、其言に云く、  
 「萬靈の蠢々たるも皆其本あり、萬物の芸々たるも各其根に歸す、未だ根本なくして枝末ある者はあらざるなり、況や三才の中の最も靈なる者にして本源なからんや、且人を知る者は智、自ら知る者は明なりと云ふ、今我人身を稟得て而て自ら己の從て來る所を知らずば、曷ぞ能く他世にて趣く所を知んや、曷ぞ能く天下古今の人事を知んや、故に數十年中學に常師なく、博く内外を考へて自身に推原し、之を原ねて止す、果して其本を得たり、云々云々、然るに當今の學士各一宗を執し、天地人物に於て凡て眞實の根源に究め至ること爲し、故に余今内外の教理に依て萬法を推窮め、淺きより始めて深きに進み至り、權教

を習ふ者を擧て其凝滯を斥け、後に了教に依て眞實義を顯示し、偏見を眞見に會通し、終に一乗の妙理に究め至らんとす、其文四篇あり、第一は斥迷執、第二は斥偏淺、第三直顯眞源、第四は會通本末、其本旨大抵是の如し、今其各篇の大意を略記せんに、先第一斥迷執篇に於ては著者儒教及び道教の説を駁して不完全なる者と論結す、其言に曰く儒道二教即ち孔孟老莊の説によれば人畜等の類は皆虛無の大道の之を生成し之を養育するなりと云ふ、是即ち道法自然に元氣を生じ、元氣は天地を生じ、天地は萬物を生せりと謂ふ者なりとす、故に此説に依れば愚智貴賤貧富苦樂は皆天より稟くる者にて、只天命に由る而已、而して死後は復た天地に歸り、魂は天に、魄は地に、各其の虛無に復り沒す可し、然れども是等の宗旨は只此身の上に就て説を立てたる者にて更に此身が由て來りし根元を究めず、此身の生死何故に是の如くなるやを明かにせず、是其完からざる所なり、試に之を詰らんに、先其所謂虛無の大道は生死賢愚吉凶禍福の由て出る所なれば、其大道已に至善な

らず、何ぞ大道と稱するに足んや、且又萬物皆是の如く自然に生じ偶然に成らば、人何故に馬を生まざるや、馬何故に人を生まざるや、且又其所謂一元氣よりして萬物生せば、如何にして各嬰孩習はざるに愛憎喜怒の情念を懷くや、若是等を習はずして能くせば禮樂射御書數の如きも同じく習はずして能すべき道理ならずや、是等の諸點に於て儒老の徒は十分の解を與ふる能はざるなり、且又人もし死して虛無に歸せば何物か鬼神靈魂たらん、然るに世上には靈魂の存在せる證跡少からず、魂神の變事亦無きに非ず、是人の死して滅盡せざる明證なり、且又天地の氣は本より知覺なき者なり、其無知の氣を稟て人となれる者如何にして知覺あるや、又同氣を稟たるの草木何ぞ知覺なきや、且又萬事皆天命に由らば奚ぞ貧苦多く富樂少く、惡人榮え善人惱むこと是の如くなるや、天道殆ど善惡を辨せざるが、其不完全なること是の如し、是を以て知る、此教を取る者は未だ人類の本源を尋ね究むることを得ざるなり、著者宗密が第一着に孔孟老莊の説を破する所是の如し、然りと雖も此

論未だ精からざる所ありて人を満足せしむる能はざるが如し、宗密自ら言ふ我は數十年間學無常師博考内外と、然ば徧ねく漢土古來の諸學派の所説に通曉せるなる可しと思はるゝに、此議論に依れば未だ儒教と道教の異同を知らず、儒者と道者の性理學に通せざるが如くに見ゆ、此の如くにして漠然此大問題を儒老の所説に尋ねんとす、其當を得ざる事固より怪しむに足らず、且又漢土には儒老二教の外に尙許多の學派ありて皆多少此問題に關する事を議論せり、何ぞ其諸學派の説を參觀せざるや、是其中には宗密が此に非難する所に十分の答辨を與ふる者あればなり、先宗密言ふ、儒道二教説く人畜等類皆是虛無の大道生成養育すと、是何の經に依るや、孔子は堯舜を祖述し文武を憲章せり、而して是等聖賢の教相合して一體を爲して儒道と成る、然るに是等聖賢の中には一人として虛無の大道は萬物の本なりと説きし者はあらず、適天地萬物の根本を説けるが如き語あるも、是只事に觸れて發したる者にて、眞の性理論には非ず、今假りに之を性理論と見倣して此に其意の

如何を見んとす、易經の繫辭に云く、易有太極、是生兩儀と又曰く一陰一陽之謂道と、又説卦に曰く、立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁與義と、大抵是の如し、此所謂太極は決して虛無の大道には非ず、又陰陽を以て天之道と爲せば、其虛無に非ることも明かなり、夫太極とは至大至高、至廣至濶、至善、至聖、至妙、至極の尊號にして、其の太は大無以加之稱なりとす、老莊の所謂太初太一無極等も是と同義同物にして共に天地萬物の根源を指せる者なり、只彼等は其上に更に至妙なる道てふ者を立てたる而已、道豈全く虛無ならんや、正に正義に説ける如し、曰はく太極は謂天地未分之前元氣混沌而爲一、即是太初太一也と、其之を無極とも稱するは人の智力にて量度す可らず思議す可らざるに因りて也、太極と無極とは是の如く其義一なり、而して又太極は只一の達理なる者にも非ず、無知の法則たる者にも非ず、萬有の由て出たる根本の本體なり、其用は即ち一動一靜一陰一陽にして流行して止す、生々窮り無く、無にして有、有にして無、實に名狀す可らず思量す可らず、已に是の

如くなれば、是は固より虚無なる者にあらず、又虚無の道にも非ず、渾然  
 朕兆なく冲漠形象なき實體なりと謂ふ可し、然れば何ぞ死後盡く虚無  
 に歸して消滅すと謂ふ可んや、是を以て宗密の彼の駁議は精からざる  
 者と爲すなり、

次に又道教の上に就て之を考るに、宗密の言同く盡さざる所あり、先老  
 子の説を見るに言ふあり、云く道生一一生二二生三と、此一と稱する者  
 は即ち太極なり、此一と云者二を生せしとは即ち大極天地を生せしを  
 謂ふなり、黄帝書及び老子經共に言ふあり、云く谷神不死是謂玄牝玄牝  
 之門是謂天地之根綿々如存、とは即ち萬物の根本此有形の萬有に先ち  
 て存在し、自ら無形虚無なるが如くにして又有形實有なるが如く、虚而  
 不屈、動而愈出で、生々止まざるを形容せる者なり、老子又此太一の本た  
 る道理 (Reason, Idea) を形容して曰く、有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而  
 不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、強爲之名曰大、云々  
 と、莊子は又夫道在太極之先而不爲高、在六極之下而不爲深、先天地生而

不爲久、長於上古而不爲老と、之を要するに、夫の至妙なる道は即ち太極  
 が萬物を生じ、之を生々保存する所以之道理なりとす、故に曰ふ大道汎  
 兮其可左右、萬物恃之以生と、又曰く天法道、道法自然と、是其自然にして  
 然り、自然にして有るを謂ふなり、而して又此道即ち太極を離れざるの  
 妙を示さんとして言ふ、道之爲物唯恍唯惚、惚兮恍其中有象、恍兮惚其中  
 有物、窈兮冥兮其中有精、其精甚眞と、是に由て考ふるに、老莊の太極大道  
 も亦虚無なる者に非ず、黄帝の學派已に相傳へて谷神不死、是曰元牝と  
 説けり、然れば焉ぞ宗密が言ふ如く死後盡く虚無に歸して滅盡するの  
 教此中に在んや、

又儒教に於ても一陰一陽之謂道とあれば、其道の虚無ならざること明  
 白なりとす、宗密第一に虚無を以て儒老を難す、然れども其實は儒者却  
 つて佛者を非難するに虚無を以てするを常とす、例へば異端の虚無寂  
 滅の教と言ふが如き是なり、尤も宗儒の理説の如きは、時に或は太極を  
 以て理と爲し虚無と爲すが如き傾き無きに非れども、之を以て一概に

儒老を非難す可らず、

次に又宗密難じて曰く萬物皆從虛無大道生者、大道即吉凶禍福之基、云々、胎桀紂禍夷齊何名尊乎、云々、禍亂反逆皆由天則何要聖人之教乎と、是亦儒老を誣る者と謂はざる可らず、

夫已に太極と言ひ又無極と稱す、其至善たる固より疑ふ可らず、余が上に記したる太極の義解に於て之を見る可し、朱子も已に言るあり、云く大極十全、是具一箇善、有善有惡皆陰陽變化後方有と、又或人云く天本至善也、陰陽者天之道也、豈有惡乎、若夫大旱洪水怪風地震者天地自然之氣變也、云々、且夫陰陽之於事業、陰陽得其位其時則爲吉也、不得其位其時則爲凶也、と善惡の分是に由て見る可し、且又易にも天道缺、盈益謙とあり、又善を積むの家には餘慶あり、惡を積むの家には餘殃ありと教ふるあり、萬物の根本たる太極の惡性を有せざる事、智者を待ずして知る可し、次に又道教に於ても然らざる無し、老子の曰く、天之道其猶張弓乎、高者抑之、下者舉之、有餘者損之、不足者補之と、又曰く天道無親、常與善人と、又

曰く大道汎兮其可左右、萬物恃之以生、云々と、是に由て見る可し、且又彼は大道胎桀紂禍夷齊といひて難すれども、桀紂は生れて後鍛鍊宜からずして天道に悖りし者なり、天道に順ひて彼惡を爲たる者に非ず、又夷齊は天道に順ひ仁を求めて仁を得たるにて之を禍せし者は紂王の不義なりとす、人間の禍災は大抵是の如し、天道を怨むべきに非るなり、次に又宗密難じて云ふ、萬物自然生化、石應生、草或生、人と、是亦其當を失へり、試に列子の語を見よ、列子は黃帝老子の學を多く祖述せる者なり、其言に云く、有大易、有大初、有大始、有大素、云々、氣と形と質と具はつて未だ相離れざるを渾沌と曰ふ、云々、易變じて一と爲り、一變じて七と爲り、七變じて九と爲る云々、清輕なる者は上つて天と爲り、濁重なる者は下つて地と爲り、冲和の氣ある者は人と爲る、故に天地精を含み、萬物化生すと、即ち天地之生物も亦各陰陽之精に合して化々生々するなり、決して故なくして偶然に此萬物形を爲したるには非ず、且又已に石と爲り、已に草と爲り、已に人と爲りたる上なれば、石何ぞ草を生せん、草何ぞ

人を生ずる理あらんや、宗密大に誤れり、次に又宗密は言ふ天地之氣本無知也、人畜草木等しく此氣を稟く、何ぞ一は知覺あり一は知覺なきやと、是亦誤れり、太極は已に上に述たる如き者なれば、頑冥無知の者と爲す可らざるは明か也、已に天地萬物皆其中より出たる如き妙體ならずや、何ぞ之を無知と斷言するや、上に掲げたる老子が道の妙を讚したる言語を見て考へ合す可し、是の如く見來れば宗密が儒道二教の萬物人類生出説を駁する所盡く其當を得ず、尙此外細かに諸點を論詰せば彼實に立つ所を失ふ可し、然れども已に十分なる可しと思へば是よりは直に佛教の所謂小乘假説を破する所を見んとす、而して結論に至り、當今の學理に照して尙又惣體に論辨する所ある可し、

第二斥偏淺篇に於て宗密は三世の業報、善惡の因果説即ち惡を爲せし者は地獄其他の苦境に落ち、善を修せし者は地獄等の三途を免れて人間に生れ、遂に天上に生を受くといふ説を破せり、其大意を語らんに、先

善惡の因果に因て人苦樂を他生に受くと言ば其苦樂を受る人は何人ぞや、又其業を造れる者は何ぞや、眼耳手足なるか、死人も眼耳手足あり、而して其眼耳手足は何をも爲すこと能はず、若又肉心の所作とせんか、肉心は質ありて身内に繋がる、如何ぞ眼耳に入て外の是非を辨せん、若又喜怒哀惡ならんか、是亦乍起り乍滅して其常體なし、是の如く見來れば此身の中何物か主となりて業を造り報を受くるか得て知る可らず、若又身心合體して之を爲すと言はゞ、此身の死後には何者が其報を受く可きや、今日の身は已に死たればなりと、是其論破する所なり、然ども是の如きは宗密の新説に非ず、古昔の龍樹提婆の徒已に再三此等の事を論辨したり、是の如きは真正の論法に由るに非ず、唯詭辨を逞しうして敵手を攻撃するに在りとす、漢土の堅白同異白馬非馬の論と其類全く同じ、固より今日に於て口に發す可き者に非ざるなり、抑此因果説は印度古來の説にして、佛教も亦之を取りて教を立たり、此説は本人性の道德心より發したる者にして、世上各國古來大抵此類の説あら



ざるは無し、是固に漠然たる者なれども、佛教の大乗論者が駁する如き性質の者には非ず、此説に於ては其善悪業を造り善悪報を受ける者は此肉身に非ず、肉身の内に住居する靈心なりとす、此肉身は固より運動する者に非ず、専ら其内の靈心の指揮に従ふ、且其人死すれば化して塵土と成る、固より永久の眞我に非ず、然るに彼徒は此心を以て喜怒哀樂等の情の相合して成せる者と爲し、喜怒哀樂の起滅と共に此心起滅して別に體あるに非ずと爲す、是其此駁議ある所以なり、然ども此心たる若し之を此身と別物と爲すに於てはは一箇の靈體にして喜怒哀樂等は全く其用の顯るゝに過ぎざる而已、其本體には非ず、然るに彼は之を肉心と呼び、又はは身内に繋がるれば如何ぞ速に眼耳に入りて外の是非を辨せんと論ず、何ぞ其言の理に悖ることは是の如くなるや、若是肉心ならば、肉身と共に死て朽ん、何ぞ轉生の事あらん、且又此心は内に在れども、眼耳鼻舌身等を器具として能く外物を辨知するは三歳の童子も善く知る所なり、何ぞ迂腐の議論を試むることを要せんや、是全く龍樹提

婆等の糟粕を嘗て終に此に至れるならん歟、但し此人天教は唯其流轉の所以を説く而已にして、未だ其流轉者の如何にして初に生出せしやを明示せず、又如何にして究竟涅槃に入るかを究盡せざるに因て、固より完全なる説とは爲す可らず、然れども彼徒が詰難するが如き不條理の説に非ることは上に余が辨せし如し、偕此人天教未だ盡さるる所多ければとて、一層之に駕するの説を起すに至れり、之を惣括して原人論に小乗教と名く、

即ち小乗教の段に於て宗密説を爲して曰く、此教にては云ふ、此身と此心は無始の昔よりして因縁力に繋がれて假に合し、一物の如くになり常體の如くに成り居るに、衆生之を曉らすして妄りに之を執て我と爲し、此虚妄の我を愛して種々の業を造り、其因果の報を受けて逃れ得ず、地獄天上人間等の各道に輪轉して生を受け、生老病死の大海に漂ふて死して復生る、又此世界は成劫、住劫、壞劫、空劫の四劫を経て空に歸して復始まる、其狀恰も汲井輪の如し、其實は此身も此心も四大五蘊の合成す

る所而已、眞に我といふ者あるに非ず、此道理を觀念し、無我觀を修して  
我空を證得す可しと、是の如く此教にては身心の二物及貪瞋癡を以て  
根身器界の本と爲す、然りと雖も五識の如きは縁あるに非れば起らず、  
意識も時ありて行せず、且又無色界天には此四大なし、如何ぞ此身を持  
し得ん、是に由て知る此教も亦未だ身の本源を究めずと、是の如く簡短  
に之れを破す、今又此に此の教と此の破説とを批評し去りて、直に大乘  
法相教といふに論じ至る可し、

偕此大乘相教と云ふは一切唯識と斷定する教にして、即ち一切の有情  
は無始の昔よりして自然八種の識を有し、其第八の阿頼耶識といふ者  
を根本として此身を成すと教ふ、此阿頼耶識といふ者頓に迷妄を生じ  
て種々の分別異同を立て、是は我、是は物と妄想して止まず、遂に其實に  
我に非る者を認めて實我と爲し、其實に物に非る者を認て實物と爲し、  
此身體髮膚山河大地を發生し來れり、是故に人も亦實物實我に非ず、唯  
識の變現せる所なる而已、是其教ふる所の大要なりとす、宗密又經文を

引て之を難じて曰く、若し其識の變現せる所の物是の如く虚妄無實な  
らば、其之を變現する所の識も亦虚妄無實ならん、若其二の中一は實有  
にして一は虚無なりと謂ば、譬へば夢みたる心と其夢みたる物と異な  
りと謂はざる可らざるが如し、若異ならば夢は物に非ず、物は夢に非ず、  
然らば寤來り夢滅して後にも其夢みたる物現存す可し、且又其夢に見  
えたる物もし夢に非ずば是眞物なる可し、然りと雖も夢を離れては別  
に其物なし、又物に由て始て夢あり、物を見ずば夢成らじ、然らば夢の體  
いづくにか在ん、是を以て考ふるに夢みる心と夢みたる物とは一は見  
る者一は見らるゝ者の如くなれども、其實は共に虚妄無實にして、眞に  
有る者は非ず、即ち彼唯識と稱する識も亦其變幻する所の物と同じく  
空無なる者たること是と其理を同うす、皆共に自性なきなり、是即ち大  
乗破相教の主張する所にして、大に其理あり、以て大乘法相教の所説を  
破るに足れりと、是の如く此唯識教を詰難し、次に彼所謂大乘空教即ち  
破相教を排斥す、其言に云く、若し識る所の心と識らるゝ所の外物と共

に皆空ならば、其空なる事を知る者は誰ぞや、且又若し凡て實物なくんば何に依て諸の虚妄を現するや、水あればこそ假相の波瀾あれ、淨明の鏡なくんば何ぞ種々虚假の影あらんや、又彼夢想の事について言はん、其夢みる夢は必ず睡眠の人を待つ、睡眠の人なくんば何の夢か之れ有ん、是宗密が彼の大乗唯識の所説と大乘空教の所説とを破する所の理由なり、其論詰する所別に新奇なるに非ずと雖も、原人の目的を以て一應是等の兩説を破するに於ては別に之を攻撃す可き無し、抑も佛教が實有宗より始まりて空宗に進み、唯識に變せしも、全く此に宗密が喋々する所の議論其當時に熾なりしに因る者也とす、是の如き辨論は大乗の經論に數多く見ゆる所にして、余が曩に別書に於て詳記したるが如し、但し是等の大乘説は固より此に駁倒せられて再び答辨を試みられぬが如き拙き者には非ず、各々正々堂々の論陣を張りて對峙し、數世筆戰して未だ勝敗を決せざる程の大議論なり、然れども只原人の一事を論ずるなれば、先之を以て足れりとす可し、因て是よりは直に宗密が

原人の眞解と誇稱する一乘顯性教に尋ね至らんとす、  
 偕是の如く諸教の所説を辨難排斥し了りて、宗密は第三直顯眞源篇に於て其眞解と認むる所の教を述べ、其大要に云く一切有情皆有本覺眞心、無始已來、常住清淨、昭々不昧、了了常知、亦名佛性、亦名如來藏、從無始際、妄想翳之、不自覺知、惟認凡質、故耽着結業、受生死苦、云々、故華嚴經云佛子、無一衆生而不具有如來智慧、云々、今約至教原之、方覺本來是佛、故須行依佛行、心契佛心、返本還原、斷除凡習、損之又損、以至無爲、自然應用無盡、名之曰佛當知迷悟同一眞也、大哉妙門、原人盡此、  
 今此事を平易に説明せんに、先一切の衆生は皆彼の本來一點の迷なき眞の心を有つ、此眞の心は世間の人が有てる此今の心とは全く同からず、今の此心は迷に迷を重て構成せる迷心にして、貪慾愛着至らざる所なし、然ども彼の本來迷妄を離れたる大悟の心は世の始の先より常に在りて、常に清淨無垢、一點の昧き所なく、常に明かにして萬事を知る、是を本覺の眞心と名く、亦之を佛性とも名け、如來藏とも名く、然るに此眞

心世の始の先よりして虚妄の思想に翳はれて其眞性を埋没し、自ら覺知する所なくして唯只虚妄の幻物を認めて眞實の物と爲し、此を愛し彼を惡み、彼を貪り此を厭ひて種々の善惡業を作り、其因果に因て或は人間に生れ或は天上に生れ或は畜生に生れ或は餓鬼に生る、此世界に此の我等の如き萬物の靈たる人の生せしは全く是の如き變遷に由て也、即ち人類の本を尋ねれば、全く此本覺の眞心たる如來藏佛性より出來れる者なり、是故に佛行を行し佛心を心とせば、本に還りて佛性と爲るを得べし、之を即身成佛と稱す、是に由て知る可し大悟の佛陀も大迷の凡夫も、其本を推究れば、唯是同一の眞心なる而已、此妙教に至りて始て人類の本源を原ね得たりと謂ふ可し、

是宗密が此に論結する所の本意なり、是即ち宗密が數十年間學に常師なく、博く内外を考へて尋ね得たる所の眞理なり、然ども余より之を觀れば、是の如き搜索は一日の中に爲し得べきが如し、如何となれば佛教を學べる者、殊に僧侶の如きは、佛教の經論に通じ居るべき者にして、一

たび佛教の經論を學習すれば直に是の如き事は明瞭に成る者なればなり、何ぞ別に更に數十の星霜を之が研究に經るを要せんや、如何となれば宗密が此に論辨せる所は只小乘有宗より大乘空宗大乘不空宗と其次第を追ふて説き進みたるに過ぎざればなり、是等の次第は佛學者の皆直に知得る所にして、宗密が此に論結せるが如き事は彼の法界無差別論の如き數葉の大乗論を閲しても、是よりは明かに知らるゝなり、何を苦んで十數年を此に費やすを須ひんや、

但し是は宗密が好みて爲したる事なれば、他より之を咎むるの理なし、因て是より彼が此に論結せる所を評せんとす、先第一に彼は謂ふ本覺の眞心無始の昔より妄想の爲に翳はれ、自ら覺知せずして妄執を生せりと、今問はん其眞心を翳へる妄想は何處より來りしや、如何にして起りしや、宗密第四會通本末篇に説て曰く、所謂不生滅眞心與生滅妄想和合、非一非異、名爲阿賴耶識、此阿賴耶即ち身の本なりと、是即ち上に擧たる大乘法相教に於て彼が破したる彼の第八識と同一物なり、彼尙此に

其第八識を採用するならば、何故に彼處に於て之を破したるや、余其所  
以を知る、彼論じて言けらく、若唯識といふ者ありて萬端の虛妄是より  
變現せば、其之を變現する識も亦虛妄ならんと、喋々夢の譬喩を以て之  
を難せり、而して又自ら斷じて言ふ、此唯識は其識の何物たるを明示せ  
ざれば、究竟説とは爲しがたしと雖ども、大乘空教の如くは悉皆空空と  
説く可らず、是夢あれば之を夢みる所の人あれば也と、而して最後に此  
所謂本覺の真心といふを以て法相教の識に代ふ、然れども余より之を  
言へば、此二の間には大差なきが如し、先其所謂真心とは何を以て其用  
とするや、心の用は思念知覺に在り、思念知覺は識と何ぞ異ならん、佛書  
の所謂識は即ち是等を謂へる者なり、例へば意識有時不行と言ふが如  
きにて知る可し、唯宗密は此真心を以て無始已來常住常知する者と爲  
して彼の識と區別す、然ども彼法相教にも一切有情、無始已來、法爾有八  
種識と説く、是即ち自然にして在るを謂ふなり、然れば此と彼と何の異  
なる所かあらん、彼も無始より自然にして在り、此も無始より自然にし

て在り、且又俱に自ら覺識する所の物にして其間に優劣ある無し、然れ  
ば宗密が數年を費して知りたる彼の真心も其以前に數年を費して學  
びたりし唯識に超ゆる所なし、徒に自ら勞苦せし而已、氣之毒之至と謂  
はざる可らず、  
次に又其本覺の真心如何にして妄想に覆はれしやと云ふに、不生滅の  
如來藏が生滅と和合して阿賴耶識といふを起せりと答ふる而已、法相  
教にても阿賴耶識は根身器界の根本たりと説くに非ずや、其妄想は何  
處より如何にして起りしやと尋ぬるに明白ならず、只大覺の如來藏が  
突然大迷の妄想と相合せりと云ふ、是に由て其妄想も如來藏を離れて  
獨立せし者に非ることを知る可し、是若し如來藏を離れて別に一體を  
成さば、如來藏は限界ありて真源とは爲し難し、是は其他にも亦根源た  
る物あるが故なり、宗密前に儒道の太極説を破して言ふ、太極は桀紂の  
如き惡人をも生し顔回の如き善人をも天せしむれば決して其性至善  
なる者とは爲し難しと、今我此語を以て宗密が本覺心を詰らん、如來藏

は已に妄想と和合せり、且つ又其妄想の由て生ずる所の本たり、然れば是も亦虚妄なる者なる可き歟、  
 偕又佛教中なる此宗と彼宗との間に於て相攻撃し詰難する所は上に述たるが如き模様にて、彼と此と格別の相違なし、故に宗密も自ら第四篇に於て之を盡く會通せんと務めたり、即ち佛教の諸宗は淺きより深きに進める者なれば、姑く之を一説と見做して、尙此に萬物の體を成る次第を尋ぬるに、宗密亦言ふ、稟る所の氣は展轉して、本を推せば即混一之元氣也、起る所の心展轉して源を窮むれば即真一之靈心也、心の外には別に物なし、元氣も亦心の變現する者なり、此元氣二分となり、一は心識と合して人と爲り、一は心識と合せずして天地山河と爲る、三才の中に唯人のみ最も靈なるは神と合するが故なり云々と、  
 此言に依れば此五官に觸るゝ外物を組織する氣は皆彼の心の造り出せる所にして、其心の造り出したる氣また其心と合して此知覺ある人身の如きを生じ、或は其心と合せずして無知の山河大地の類を生ずる

也、若し心を離れて別に物なきこと上に彼が述たる如くならば、何ぞ別に氣と稱す可き外物ある可んや、其外物と見ゆる物は皆是心の造り出せる者ならずや、然るに又其有る無きの外物此心と合して此知覺ある生物を生じ、或は此心と合せずして山河大地を生ずといふは奇々妙々の至ならずや、  
 然れども此事は此に細論す可きに非れば、措て論せず、今よりは此問題に關する儒老の説と佛説とを比較せんとす、宗密の曰く唯一眞性不生不滅不増不減、此眞靈性與生滅妄想合名阿賴耶識、此識爲根身器界之根本と、今此説を以て儒老の太極。又は道萬物を生ずるの説と比較するに、其優劣の孰れに在るかを知らざる也、否却つて儒老の説優れるならんかと疑はるゝ也、其故何如、先佛教の眞性或眞心と稱する者と儒老の太極或は道と稱する者は、俱に自然にして在る者にして、俱に萬物の根本たりと云へば也、次に又佛説にては妄想妄念一たび動いて愚癡の情展轉増長し、氣を稟け質を受て人と爲る等と言ふ、然ども天地山河の如き

無情なる者は妄念を起す可き理なければ、如何にして此體を受しか明ならず、又之を妄識に歸し去るも頗る困難ならんとす、然るに儒老に於ては太極の眞或は玄妙の道に由て天地萬物を生せりと云ふ、即ち周子が述たる如し、曰く無極而太極、大極動而生陽、動極而靜、々而生陰、一動一靜、互爲其根、兩儀立焉、是に由て言へば佛は萬物は妄念に由て生せりとし、儒老は萬物は道に由て生せりとする也、今之を萬物の秩序あるに考へ合はすれば、儒老の説大に優れるかと思はる、唯其如何にして妄想起りて萬物生せしか、如何にして陰陽動靜を始めて萬物生せしやと云ふに、俱に之に明解を與ふるを得ず、即ち寶性論に云く衆生の義甚深、唯佛智の境能く之を理會すべき而已と、周子の曰く無極之眞、二五(陰陽)之精妙、合而凝云々と、俱に未だ明答を與へずと謂ふ可し、

天に仰ぎ地に俯して徧く觀察し、古今の學者に聽て熟々考ふるに、此宇宙間には言語の道に超えたる絶妙至巧の意匠經營粲然として八方に顯はれ、萬事萬物一として造化の妙工を稱揚せざる無し、近く之を此身

に取て考ふるに、此四肢五體は何等の妙工ぞや、此目此手何ぞ其巧を極むるの甚きや、是豈妄念妄想の妄現せる虚妄體ならんや、妄物は凡て妄なり、何の秩序經營かこれ有ん、此引力是妄なるか、妄引力何ぞ此日月星辰を維持せん、此日月星辰若妄ならば何ぞ是の如き意匠經營其中に存せんや、此意匠經營若し妄ならば我等何を以て視聽言動衣食生活せんや、此視聽言動衣食生活若妄ならば事物の眞妄を知る者は是誰ぞや、是故に余は敢て云ふ儒老の太極説は佛者の阿頼耶識説に優れりと、終りに臨んで一言参考の爲に言ひ置かんとす、抑此宇宙の萬物は上に述たる如く皆絶妙の工作を顯はす者にて、此人身の如きは殊に驚くに堪たり、是故に古代のギリシヤ人は此世界を名けて「コスモス」と呼り、是即ち美觀の義なりと云ふ、我國にて世界を「よ」と名くるは是に比ぶれば大に劣れり、如何となれば「よ」とは空間の義なればなり、實に世界は絶大美觀なり、今近く人身に於て之を言はん、古昔ギリシヤ國にソクラテイスと名くる大賢人あり、一日門人を伴ひて市街を歩きけるに、一匠氏あ

りて玉を琢りて人を作るを見る、其人形の耳といへ目といへ手足といへ悉く活る人の如くにして身體全く人と見まがふ程なりければ、門人之を見て感嘆して措く能はず、深く其精妙を讚す、ソクラテイス門弟子に答へて曰ふ、汝等は玉像が活る人に似たるを見て匠人の妙技を驚く、然れども之に近いて觸れなば其體は寒きと氷雪の如けん、之を動すとも自ら運動すること能はず、之を呼ぶとも答ふる所なけん、何ぞ然か匠人の精巧を讚むるを要せんや、若し之に反して其物をして口能くものいひ、目能く見、足能く歩かしめば如何ぞや、門弟子皆曰ふ是の如き者あらば天下絶妙の匠氏といふ可しと、ソクラテイス又曰く只是のみならず、其物をして子を生産養育して其族類を絶やさざらしめ、再び匠氏の手を煩はさしめざらば如何、門弟子皆曰ふ是の如きは神妙不思議と言ふ可し、何ぞ是の如き事あらんやと、ソクラテイス即ち容を改めて曰く、汝等奚ぞ市に行きて此奇物を玩ばざるや、彼の市上を往來する人は皆是れ百體を具して口は能く物言ひ、目は能く見、手足は能く行動し、又能

く子女を産育して代々相續ぐ、其匠人の琢りて作れる玉像にまさること何ぞ只千百倍のみならんや、是に由て觀る時は此奇なる人を作る所の匠氏なかる可らず、然れば其匠氏は此玉像を作れる匠氏に勝りて神なるとは自ら明かなるに非ずや、何ぞ先此匠氏を尊ばざるやと、愚案するに、此ソクラテイスの短かき語は宗密が十數年を費して尋ね得たる數十萬の佛語よりは反つて意味深遠ならざるか、讀者請ふ之を判せよ、此ソクラテイスが指して言たる匠氏は即ち造化主なること疑ふ可らず、思ひあはずればパウロも又羅馬書の中に述たる事あり、曰く、造物主の大能は世の始より以來其造られたる物に由て明かに見らる可しと、深く考ふ可し、想ふに佛者は只衆生の苦患を認めて説を立てたるが故に、是の如く虚妄を以て萬物の由て起れる道理と爲せし也、然れども天下の事は大抵衆旨の象を摸るが如し、一時に其全體を見ること信に難し、只佛者に於て而已之を咎むべきに非ず、其非なる所を棄るに吝ならず、其是なる所を取るに敏ならば、皆均しく君子と謂ふ可し、



以上章を疊ねて説き來れる所に照せば、基督教儒教佛教等の世界觀は、其各自の開闢説と共に灼然として觀つべし、尙以下説き出さんとする所を参照するを要す、

第十一章 天地世界の實相—萬有實體論

實有論リアリズムと唯靈論スピリチュアリズムと唯物論マテリアリズム

前章の末部に於て、余輩は人類の起原を論ずるに當りて、傍ら原人論に、批及し、併せて佛教の各大乘説を瞥見したり、唯識唯識、般若般若、華嚴華嚴等是なり、或は云ふ一切の外境（物象）は皆、悉く心識の現出する所のみ、或は云く、一切の内外法（我物）は皆、悉く空虚なる而已と、今之を西洋の哲學に照すに、亦頗る相似る者なきに非ず、即ち其所謂萬有實體論（ontology）上に於ける紛々たる異論是なり、余輩は茲に哲學史を講ずるに非れば、只唯本論に必要なだけ此等の説を一瞥せん而已、

宇 宙 觀

按ずるに、天下諸國の人々は、初は皆、天地萬物を其人眼に映ずる如く實際に存在する者と見做したり、否な其實際存在をば勿論の事と爲し、全く之を不問に置きたり、之を眞率の實有論 (naive realism) と稱す、又幼稚の實有論と號す、支那哲學の如きは最初より此種の實有論を抱持してありき、老莊の玄幽と雖も、此點には多分の疑を挿まざりし者に似たり、公孫龍等が主唱せし堅白同異、白馬非馬説の如きは、幾分か皮相を去つて裏面に就ける趣なきに非ざれども、多くは幻法的詭辯を弄びたるに過ぎざれば、結果極めて少なかりき、其論に曰く、

『堅と白と石とは三なりとせば可ならん乎、曰く不可なり、然らば二とせば可ならん乎、曰く可なり、目に石を視

天地世界の實相一萬有體論

るに、只白を見て、其堅を知らざれば則ち之を白石と謂ひ、又手其石に觸れて其堅きを知るも、其白きを見ずば、之を堅石と謂はん、是れ堅白終ひに合して一と爲す可らざる所以なり、』

夫の白馬非馬も亦之と同日の論のみ、列子にも既に其説の見えたる者あり、然し乍ら白馬非馬の詭辯は僅か一關吏をすらも心服首肯せしむる能はざりしを如何せんや、故に荀子は言ふ、堅白同異之辯非不明察也、然而君子不辯、止之也と、要するに劇談詭辯なれば也、故に余輩が上に説ける如く、支那の哲學者は概して實有論者 (realism) にてありき、多くは所謂幼稚なる、若くは眞率なる實有論 (naive realism) を懐ける者なりき、支那人の如く抽象の念に乏し

いいて徹頭徹尾具象的なる國民に在ては、此事實に當然の至りなりと謂ふべし、彼等は四季の美を説かんとするや、花。鳥。風。月。と云ひ、雪。月。花。と説く、廣大なる平原をば萬里の平原と稱し、饜くなきの貪慾をば豺狼の慾と稱す、其他殊塗同歸と曰ひ、異曲同工と曰ひ、金玉の文字と曰ひ、腹心の友と曰ふ、孰れか具象(具體)的ならざらんや、實に支那人の如きは天成の實有論者と謂ふべし、

希臘の古代に於ても亦然り、上古の哲人は勿論耳、目の視聽を正確なる者と見做して、森羅萬象の實有なるを信じ、天真爛漫として天地の(所謂)現象に満足したりし也、然し乍ら流石(さすが)に哲學心に富める彼等の事とて、早くも既に元子論者輩(Atomists)(西洋紀元前五六百年前より出づ)は此の幼稚なる實有境を

超越せんと試むるの止むを得ざるに至りぬ、之を詳言せんに、實有論とは吾人の五官若くは六官に感知せらるゝ萬象は悉く皆實體にして、其上には、又其外(外)には、別に實質の存する者なしと主張する也、但し其之を爲すに種々の方(かた)あり、専ら覺官(五官)の實驗或は經驗に基づく卑近なる者を實驗、實有論、又は經驗、實有論(empirical realism, empiricism)と號す、是の如き實有論は固より博雅の君子を待たず、匹夫匹婦、車夫馬丁も亦能く懷くを得べし、只其組織立たざる(unsystematic)を憾むる而已、既に此徒輩は其所謂有形なる視聽物象を以て、實體と爲し、一切の觀念を悉く是より抽き出さんと務むるが故に、其説を正當に推擴むるや、動(動く)すれば唯物論に流れ、機械的

宇 宙 觀

に又は命數的に萬事を處斷せんとす、而して其弊や往々無形の道德倫理を蔑如せんとす、是從來の所感なりき、ルバルトの實有主義は名同じくして其實異なる者なれば、此の範圍に入らずと知るべし、但し文化の進み、知識の開くるに隨ひて實有論は漸次各種の科學(物理化學天文等)と同盟するに至り、復曩日の如き稚態を存せず、大いに觀る可き者と成り來りたるは事實なり、例へば獨逸の現代哲學者 キルヒマン (Kirchmann) の如きは、力を極めて實有論の護持開拓に務めつゝあり、彼が嘗て 伯林 (Berlin) 哲學會に試みたる一大演説の如きは當時尤も識者の注意を惹けり、キルヒネ ル氏 は其演説中に實有的哲學論の強點大凡八種を臚列して、之が眞箇に學術的、常識的、實驗的哲學なることを縷

天 地 世 界 の 實 相 一 萬 有 實 體 論

述せり、其一に曰く、『實有論は其主義原理を萬人と共にし、各人之に由て其知識を獲得することを得るが故に、實有哲學の發する言語は明晰にして、毫も其中に撞着ある無く、凡て常識ある人は直ちに領會するを得べし、云々、然りと雖ども、是なほ一種の眞率實有論たるを脱せず、其觀るべき所は最近の學術と提携するに在りとす、實有論に反對して古來唯心論或は唯靈論 (idealism) と稱する説あり、實有論が目視耳聽の現象を實體と見做すを辯駁し、主張して曰く、外界の物體觀象は悉く只是れ心識の所現にして、實有に非ず、物質は觀念の幻像にして、靈心獨り眞箇の實體のみと、勿論一口に唯心論または唯靈論と云ふと雖も、實は其中に亦種々の派別ありて存す、プラト

宇 宙 觀

は觀念<sup>①</sup>(Ideas)を以て萬有の根本或は實體と爲し、觀念或は理なる者宇宙萬物を形成すと説けり、是即ち所謂プラト哲學(Platonism)にして、萬殊の哲學中最も高尚なるを以て稱せらる、夫のエマルソンも亦、一種の有神的唯心論者なりしが、嘗て自然<sup>②</sup>若くは萬有<sup>③</sup>を論ぜるや實に左の語をなせり、曰く、『日月星辰、森羅萬象、是れ吾人の目に燦爛たりと雖ども、我は其果して實有なるや否やを知らず、手これに觸る可らず、口之を味はふ可らざる百千萬里外の物象は之を幻影と見做すも何ぞ妨げんや、吾人は造物主が假に斯る絶大の繪畫を天に描きて吾人の目を樂ましめ給ふと思惟すとも、實際に於て毫も損する所なけん』、曰く『唯心觀が世俗の信仰上に及ぼす所の利益は、开が全く人心に

天 地 世 界 の 實 相 一 萬 有 實 體 論

全く最も悦ばるゝ如き世界觀を提供するに在りとす、是實に哲學と道義とが均しく取る所の達觀にこそあれ、『心靈は常に物質に主たり、而して進歩を旨とす、世界の裏面には心靈の恆に活動して止まざるを見る也』云々、前に論及せる佛教の唯識論は即ち今日の所謂唯心論<sup>④</sup>と一般なり、一切の我法<sup>⑤</sup>(主觀と客觀と)を悉く心識の化現と爲し、随つて又之を盡く虚妄と見做すなり、佛教に成唯識論と題する一篇の哲學論あり、正に此の問題を論ずる頗る詳かなり、其の頌<sup>⑥</sup>(詩の類)凡そ三十句あり、以て之が大意を略説す、試みに其一二を掲げんに、云く――

由假説我法

有種々相(外境相即轉)

宇 宙 觀

彼(即ち)依識(即ち)所變(即ち) 此(即ち)能變唯三(即ち)  
 謂異熟(識第八)思量(識第七) 及了別境(識前六)識(識)  
 其大意に曰く、假の名辭を以て主觀と客觀即ち物我の存  
 在する由を説く也、而して之が爲めに種々なる外境相の  
 展轉する者あり、要するに、外相は心識の客となりて變化  
 せられ、心識は外物の主にして能く之を變化す、異熟云々  
 の三箇は即ち能變的心識の名稱なりと知る可し、(能變は主となりて能く他を變化する者、又所變は變化の客となりて他に變化せらるる者なり、之を能所と稱す)  
 斯の如く唯識は一切の事物を悉く心意内識の幻化物と  
 斷定す、正に經論に説ける如し、心は幻法師の如し、變幻奇  
 妙なる衆相を現出し來りて、人目を眩惑す、眞に空華のみ、  
 内識獨り實在す、云々是れ佛道の唯識説なり、唯心觀なり、

天 地 世 界 一 實 相 萬 有 實 體 論

但し印度の佛教哲學家は唯に實有と唯識との二論を以  
 て足れりとせず、更に又一步を進めて、空義を唱へて曰く、  
 『所變之境(客)既妄能變(主)之識豈眞、若言一有一無者則夢想  
 與所見物應異』起信論に曰く、一切の諸法は唯妄念に依て  
 差別ありと、然り、心念も亦虛妄なる而已、是に於て乎、一切  
 空となり畢んぬ！但し空宗の義につきては、佛教を誣ひ  
 ざらむ爲に、余輩は茲に一言其空の性質を辨ぜざる可ら  
 ず、  
 上にも粗説ける如く、大乘(摩訶)の中には固より種々の別  
 あり、然りと雖ども、之を大別すれば空宗と不空宗の二宗  
 に過ぎず、大乘空宗は全く小乘有宗を破する者にして、萬  
 法皆空と論じたり、然ども萬法皆空の説は外道の斷見に

宇 宙 觀

異ならずして、大に世間出世間の道に害あり、若し萬法皆空ならば則ち空無なり、何ぞ衆生あらん乎、何ぞ佛陀あらん乎、何ぞ德行あらん乎、何ぞ罪惡あらん乎、何ぞ解脱あらん、何ぞ涅槃あらん、然らば何ぞ佛道を須んや、萬物總て實體ありと執するは即ち常見にして過てり、若し又都て无しと謂ば、空見に墮して惡取空を成すべし、寧起有見如須彌山不起空見如芥子許、是に於て妙空の説起りて萬有皆空無の偏説を一新す、般若諸經は空經とは呼べども、惡取空を成すの空見を教ふる者に非ず、全く妙空を教ふる者なり、是故に實は中道不空觀と大差なし、只其名の異なるのみ、或る經に諸摩訶衍經多說空義云々と言ひて空經を排斥せるは、全く般若の空が皆無の空に非ず妙空なるを

天 地 世 界 之 實 有 體 論

知らざりし也、試みに般若經の語を視よ、

爾時世尊諸の菩薩の爲に一切法の甚深微妙なる般若の理趣清淨の法門を説きたまふ、此門は即ち是菩薩の句義なり、如何なるを菩薩の句義と爲すや、謂く極妙樂清淨の句義是菩薩の句義なり、諸見永寂清淨是菩薩の句義なり、色受想行識空寂なるは是菩薩の句義なり、諸佛の无上正等菩提空寂清淨の句義是菩薩の句義なり、世間出世間の法空寂清淨の句義是菩薩の句義なり、所以は如何ん、以一切法自性空故、自性遠離なり、遠離に由るが故に自性寂靜なり、由寂靜故自性清淨なり、清淨に由るが故に甚深の般若波羅密多最勝清淨なり、

是等の文に由て妙空の何物たるは曉る可けん、其他仁王波羅密經に説ける所も是と同じ、又般若心經に云く、舍利弗、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、受想行識亦復如是と、即ち第一義空を説ける者にして、實相の妙空なり、楞

嚴等の中道經に性空眞色性色真空等と説けると何ぞ異ならん乎、

然らば則ち般若妙空とは何物ぞや、第一義空とは何の義ぞや、在昔龍樹提婆の諸學者菩薩善く此義を辯論せり、龍樹は常に空觀を稱讚して一切諸觀中、空觀最第一と説ける者なるが、是即ち中道第一義空なりとす、其語に云く

若人有問者、離空而欲答、是則不成答、俱同於彼疑、若人有難問、離空說其說、是則不成難問、俱同於彼疑、

其意は若し人難問し或は答辯する時に當りて、空義を以て之を爲さざれば俱に眞解に至らずして、等しく誤謬に陥り、疑難を以て疑難を説くのみにて解説に至らずと謂ふなり、龍樹乃ち空義を演て云く、不生亦不滅、不常亦不斷、

宇 宙 觀

天 地 世 界 の 實 相 一 萬 有 實 體 論

不一亦不異、不來亦不出、能說此因緣、善滅諸戲論、此妙空理觀、諸觀中第一なりと、龍樹又云く、

衆緣所生法、是即無自性、若无自性者、云何有此法、

此四句の偈頌を以て龍樹は内外の諸法を空解す、此四句は實に龍樹が空義の要なり、内外諸法とは體外と心内の諸事物を謂ふ者にして、體外の物は外因緣より生じ、心内の事は内因緣より生ず、例へば今此に一家屋あらんに、其家屋は土地と築基と梁椽と泥草と人功等を合して始めて成れる者にして、之を外緣生の家屋と曰ふ、又此に巨萬の財寶あらんに、人其財寶を見て慾心を生じ、種々に之を獲んと計畫する時は、其貪求希圖する心即ち内緣生の法なりとす、



熟ら考ふるに此等の内外法は皆虚妄不實なり其故如何  
 ん。夫れ家屋は家屋の自性自己之性ある者に非ず。土地、築  
 基、材木、泥草、人功等の衆縁が和合結合して成りたる者な  
 れば此等の衆縁を離散する時は家屋なし、全く空に歸し  
 去るべし。或人辯じて云く、然らず、抑も家屋は衆縁の離散  
 に由て其體を失ふべしと雖も、其家屋を構成せる所の材  
 料、土地、工人等は依然として存す、何ぞ家屋空に歸し去る  
 と謂ふ可んと、此言蓋し無知の戲言のみ、試に今其衆縁た  
 る諸物の上に就て一々觀察を下す可し、是等衆縁の諸物  
 は亦皆悉く衆縁の集合に由て成り出たる者なり、材木は  
 材木の自性あるに非ず、凡て材木は皆水と土との結合よ  
 り體を得たる者なりとす、今水と土とを分離すれば、即ち

材木消滅す、何れの處よりか家屋の材木を獲ん、次に又人  
 功の上に就て考ふるに、人は人の自性ある者に非ず、唯四  
 大の結合に由て身體をなしたる者のみ、此理は是れ人の  
 朽て異物に化するを見て知るべきなり、  
 是の如く觀來れば、家屋等の如き有爲物は咸く悉く自性  
 なし、自性なきが故に他性もなし、其物を索るに天上天下  
 四方八方何れの處にも得べからず、是を不可得法と呼ぶ、  
 既に其性无れば是は眞實の物に非ず、虚假の物のみ、虚假  
 にして實體なければ是即ち空なるに非ずや、實に是れ空  
 なり、是を以て萬法有爲の物皆空なるを知る、妄りに執し  
 て實有と爲す可らず、此理を以て推す時は、心内の諸法も  
 亦空なるのみ、是は虚妄の心意念慮の相縁會して成る者

なるが故なり、  
但し唯心論が斯の如く東洋に於て遂に萬物皆空の極端に奔りつゝある間に、西洋に於ては實有論漸々と歩を運びて、終に萬有皆物の極端に迄邁進せり、有名なる唯物論 Materialism 即ち是なり、

宇 宙 觀

第十三章 天地世界の實相——萬有實體

論(承前)

唯物論——超絶的唯心論——超絶的實有論

天地世界の實相——萬有實體論

前章に於て余輩は既に唯心論が——特に唯識論として東洋に於て——萬物皆空の極端にまで遠く奔りたる由を説けり、唯心論が斯の如く萬有悉皆空境に達したるを虚無論と稱す、一切虚無を以て特色とすれば也、之を *Nihilism* と呼ぶ、*Isis* が露西亞の極端社會黨と稱呼を同じうするは幾分か不祥の觀なきに非ず、  
但し祥不祥は兎まれ、角まれ、極端は決して正理に非ず、宇宙果して虚無ならば、此目見の森羅萬象は畢竟何物ぞや、

宇 宙 觀

開闢以來幾千萬年幾億幾兆の人類之を視之を聽き之を味はひ之を嗅ぎ之に觸れて皆同一感覺を生じたりしは抑も如何なる故ぞや、此の疑團鬱結して未だ解けざる中に、他方に於ては早くも實有論は其五官のみに倚賴信據して、遂に是も亦同じく極端なる唯物論を生じ來れり、唯物論の名は久しく殊に近世に於ては天下に雷轟せること人の皆知る所なるが、我が國に於ては數年前兆民居士中江篤介氏の絶筆に成れる『續一年有半』中に在りて尤も江湖に喧すしく成りぬ、兆民居士の唯物主義は同主義中の最新最精なる者には非ざれども、該論の大體を表出するには十分なるを覺ゆ、兆民居士は其哲學を無神無靈魂哲學と題し、之に命ず

天地世界の實相一萬有實體論

るに中江哲學或は中江教(Nakajimism)てふ名を以てしたり、故に居士は専ら獨斷的に無神觀及び無靈魂心理學説を唱へたりき、余輩嘗て大に居士の哲學を評論したる事ありしが、其一部分の如きは、亦以て本書の參照に供するに足るべし、『儲中江氏は是の如く從來無神論者なりけるが、今其命數の一年有半と限られ、次で二箇月と宣告せられたる其日に於て、小膽の常人ならば或は俄かに未來の怖ろしくなりて、忽ち弱音を吹き始めんに、毫も其痕跡なきのみならず、其の膽略は更に幾層の強度を増し來り、敢然として天下公衆の前に無神無靈魂の福音(?)を宣説し、幾分か絶望的なる口調にては有れども、毅然として揚言して曰く、

「プラトンや、プロタンや、デカルトや、ライプニツトや、皆宏遠達識の傑士で有りながら、知らず識らずの間己れの死後の都合を考慮し、己れと同種の動物即ち人類の利益に誘はれて、天道、地獄、唯一神、精神不滅等、煙の如き否な煙なら現に有るが此等の物は唯言語上の泡沫で有ることを自省しないで、立派に書を著し、臆面も無く論道して居るのは笑止千萬で有る、又歐米多數の學者が、孰れも母親の乳汁と共に吸収して身軀に血管に浹治して居る迷信の爲めに支配せられて乃ち無神とか無精魂とか云へば大罪を犯したるが如く考へて居るとは笑止の極で有る、

成程人の肉を肝にして恣睢暴戾を極めた盜跖が長壽して、亞聖とも云はるゝ顔回が天死し、其他世上往々逆取順守を例とせる盜賊的紳士が榮えて公正の行を守る人物が糟糠だにも飽かずして死するを見る、と、未來に眞個公平の裁判所が有ると云ふが如きは、多數人類に取りて都合の好い言ひ事で有る、殊に身大疾に犯され、一年半年と日

々、月々死に近づき、つい有る人物等に在ては、深仁、至公の神が有り、又靈魂が不滅で有て、即ち身後猶ほも獨自の資を保ち得るとしたならば、大に自ら慰むる所が有るであらう、併し夫では、理學の莊嚴を奈何せん、冷々然唯道理是れ視る可き哲學者たる資格を奈何せん、生れて五十五年、稍や書を讀み、理義を解して居ながら、神があるの靈魂が不滅と云ふやうな囁語を吐く勇氣は、余は不幸にして所有せぬ、

此の勇氣は大いに多とすべし、夫のトム、ペーン(Thomas Parson)の如き道理の世(Age of Reason)と題する有名の書を著して、一時歐米の宗教界に大波瀾を生じ、佛國の革命界にも亦強烈なる影響を及ぼしたる者なりしが、斯る勇將其人すらも死際には頻りに青息をつき、冷汗淋漓として其脊を濕ほしたりと稱す、是れ或は人情の自然ならんとは、雖も、亦甚だ醜態を現じたる者ならずんば非ず、然は云へ、

パンヤンをして辣酷の評を試みしめんには或は例の詩篇を引きて左の如く斷言せんも得て知るべからず、天路歷程の末部に主人公クリスチャンが死に臨みて悶ふるを希望子てふ伴侶慰めて曰く、

兄弟よ、君は全く忘れたり、聖書に云はずや、不信者は其死に苦なく、其かは強し、彼等は從容として他の人々の如く憂へ悶へずと、

只余輩は甘んじて之に賛成を表する能はざるを憾むのみ、并は兎まれ角まれ、無神無靈魂の中江哲學とは果して如何なる者ぞ、兆民先生は乃ち説を進めて斷言すらく、

『第一靈魂より點檢を始めやう、靈魂とは何物ぞ、

目の視るや、耳の聴くや、鼻口の嗅食するや、手足の捕捉し行歩するや、一考すれば、實に奇々妙々と謂はねばならぬが、誰が之を主張するの

## 宇 宙 觀

## 天地世界の實相一萬有體論

で有る、想像の力、記憶の力に至つては、其奇なることは更に甚しい、乃至今日國家社會を構造するは誰の力ぞ、諸種學科を開發し推進し、蠻野を出で、文明に赴く者、皆所謂精神の力と云はねばならぬ、若夫れ體軀は唯五尺とか六尺とかに限極せられて、十三元素とか十五元素とかを以て捏ね固められて畢竟一の頑肉で有る、然れば靈妙なる精神が主と爲りて、頑肉なる體軀は之れが奴隸で有らねばならぬ云々、此言や是れ正に大謬戾に陥いる第一起頭で有る、精神とは本體ではない、本體より發する作用で有る、働きで有る、本體は五尺軀で有る、此五尺軀の働きが、即ち精神でふ靈妙なる作用で有る、譬へば猶ほ炭と焰との如きで有る、薪と火との如きで有る、漆園叟は既に此理を觀破して居る、夫れ十三若しくは十五元素、一時の抱合たる軀殼の作用が、即ち精神なるに於ては、軀殼が還元して即ち解離して即ち身死するに於ては、之が作用たる精神は同時に消滅せざるを得ざる理で有る、炭が灰に成り薪が燼すれば、焰と灰とは同時に滅ゆると一般で有る、軀

殼既に解離して精神猶ほ在りとは背理の極、苟も宗教に隱微せられざる、自己死後の勝手を割出しとせざる健全なる脳髓には、理會され可き筈でない、唐辛は無くなりて辛味は別に存するとか、大鼓は破れて琴々の音は獨り遺つて居るとか、是れ理義を思索する哲學者の口から眞面目に言はるゝ事柄で有ろうか、十七世紀前の歐洲では若し無神無精魂の説を主張すれば、或は水火の酷刑に處せられたので、已むを得ぬ事情も有つたかは知らぬが、言論の自由なる道理に支配せられ可き今日に在て、猶ほ此囁語を發するとは、何たる事ぞ、故に軀殼は本體で有る、精神は之れが働らき即ち作用で有る、軀殼が死すれば精魂は即時に滅ぶので有る、夫れは人類の爲めに如何にも情け無き説では有るが、情け無くても眞理ならば仕方が無いでは無いか、哲學の旨趣は方便的では無い、愚論的では無い、縱令殺風景でも、剥出しでも、自己心中の推理力の厭足せぬ事は言はれぬでは無いか、若し宗旨家及宗旨に魅せられたる哲學者が、人類の利益を割出し

たる言論の如く、果して軀殼の中に、而かも軀殼と離れて、軀殼より獨立して、所謂精神なる者が有つて、恰も人形遣が人形を操る如く、之れが主宰と成つて、軀殼一旦解離しても、即ち身死しても、此精神は別に存するとすれば、軀殼中に在る間は、孰れの部位に坐を占めつゝ有るか、心臟中に居るか、脳髓中に居るか、抑も胃腸中に居るか、是れ純然たる想像では無いか、此等臟腑は孰れも細胞より成立ちて居るからは、彼れ精神は幾千萬億の細片と成つて此等細胞中に寓居しつゝ有るか、曰く、精神は無形なり、實質有るに非ずと、此言や正に意味なき言語で有る、凡そ無形とは吾人の耳目に觸れない、否な觸れつゝ有ても吾人の省しないものを謂ふので、即ち空氣の如き、科學の目にのみ有形で、顯微鏡にのみ有形で、肉眼には正に無形で有る、凡そ無形とは皆此くの如く實質は有ても極めて么微で、吾人之れが觸接を覺へないでも、其實は矢張形有るものを謂ふので有る、彼れ精神の如き、若し此くの

如くで無く、純然無形で實質が無いとすれば、是れ虚無では無いか、虚無が軀殼の主宰なりとは、果て穩當なる言ひ事であるか、凡そ無形と云ふものは、皆今日迄の學術で未だ捕捉し得ないか、又は學術では捕捉されても、肉體に感得せられないもので有る、即ち光、温電等の如きでも、學術益々進開した後は、果て顯微鏡で看破し得るかも知れないでは無いか、彼れ精神の如きでも、灰白色腦細胞の作用で以て其働らく毎に極て幽微の細分子が飛散しつゝ有るかも知れないでは無いか、凡そ學術上未解の點に就て想像の一説を立るには、務めて理に近いものを選ぶが當然である、即ち精神の如きも、軀殼中の腦神經が因纏し摩蓋して、茲に以て視聽嗅味及び記憶、感覺、思考、斷行等の働らきを發し、其都度瀑布の四面に潰沫飛散するが如くに、極々精微の分子を看破し得るに至るだらうと臆定し置ても、必ずしも理に悖りて人の良心を怒らすが如き事は無いでは無いか、之れに反し、分子も形質も無き純然たる虚無の精神が一身の主宰と成りて種々

の働を爲すと云ふが如きは、如何にも悖理では有るまいか、人の良心を怒らす可き性質では有るまいか、

余輩は之を讀んで、一は居士が放言の餘りに銳利なるに吃驚し、一は居士が議論の餘りに通俗なるに失望す、必らずしも鐵面皮なりとは言はじ、必らずしも淺薄なりとは言はじ、余輩何ぞ這般の文字を用ふるに忍びんや、然れども亦居士の辭なればとて驚を鳥と認め、馬を鹿と稱ふるが如き阿諛迎合を盡す勇氣も敢て有せざる也、曲學阿世は學者の愧べき所なりと聞く、學者にして學理の是非を争ふに誰かまた之を咎めんや、是に於てか余輩も勇を鼓して今より少しく此中江哲學に論評を加へんと欲す、凡そ物事にはそれぞれ其道あり、其法あり、叨りに之が領

分を侵す可らず、例へば撃劍の道場に入りて試合を爲んと欲するか、先づ劍道の法則を心得をらずんば有るべからず、竹刀の持ちやう、足のふみやう、體たいのきめ、眼がんのくばり、上段青眼、陰陽開闔、必ず法あるを要す、然らざれば多くは我流がれうにして観るに足らず、哲學に於も亦安んぞ斯の如くならざらんや、中江氏は、勿論一種の哲學者なり、然哲學者なりと雖も、固より正式の哲學者に非ず、されば氏は毫も哲學の法則を審らかにせず、只大聲疾呼して以て此無知を掩ひ去らんとす、何ぞ其大膽なるの甚だしきや、是れ未だ劍の持ち様だも知らずして直ちに天下の大道場に他流試合を申し込むが如し、換言すれば、丸橋忠彌の腕ありてこそ始めて由井正雪の道場に試合を望み得べけれ、

宇 宙 觀

天地世界の實相一萬有體論

之を要するに、中江篤介氏は常識哲學者(Common-sense philosopher)のみ、毫も哲學者の眼光を有するに非ず、哲學者たるの知識を有するに非ず、只常識を以て百事を論斷せんと試むる而已、既に然るが故に遺憾ながらも氏は舊式の唯物論者たらざるを得ざりき、斯の如くにして今日の哲學者を心服せしめんと試むるは、餘りに大膽なる所爲と謂はざるを得ず、  
中江氏は口を開けば則ち言ふ、吾人の體軀は若干元素の抱合より成れるものにて、此元素、随つて此體軀は不滅なり、其他の精神の如きは死滅すべしと、舊式古風の唯物主義を以て之を視れば、此の説如何にも道理ある者の如し、然れども人身は果して單に物質たる若干元素の抱合に



宇 宙 觀

過ぎざる者なるか、斯の如き純乎たる唯物觀をば中江氏が嘗て尊崇したりしシヨペンハウエルすらも斷然排斥して *Barbieregesellen Philosophie* (*Barber's men Philosophy, Barber-philosophy*、床屋哲學、下剃哲學) と名けたり、按ずるに *Barbieregesellen* とは英語の所謂 *barber's men* たり、即ち髮結床の下剃の謂にして、其拙劣粗笨なる蓋し言ふを俟たざらん、兎に角床屋哲學とは餘りに有難き名稱に非ず、然れども純乎たる唯物觀を以て宇宙の諸現象を悉く解き去らんと試むるは髮結の手間取流と大いに徑庭する所あらざるべし、此言辭中江氏に對しては多少不遜の嫌あらんと雖も、實は是れ中江氏が數年前尊崇する餘りか其著書を道徳、大原論と題して佛文より重譯したるシヨペンハウエルの吐

天 地 世 界 の 實 相 一 萬 有 實 體 論

る語なれば中江氏の靈も決して之を無禮の文字として地下に忿るが如き事はあらざるべけん歟、當代傑出の一獨逸哲學者ドイゼン (*Deussen*) は明言して曰く、『宇宙に於ける諸他の物類と均しく此我吾自身なる者は、一面は現象にして、又一面は實體なり、』是れ最近の哲學なり、必らずしも有神哲學と言はじ、然れども是れ最近哲學の遂に究め到れる一眞理なり、否、天地萬物は其實體のまゝにて吾人の覺官内に入り來るとの常識説はカント已に之を一百年前に破し了りぬ、』××××××××××

『讀者諸君の熟知せらるゝ如く、昔は唯心論者も唯物論者も俱に誤まれり、否、な啻に昔に於て然るのみならず、今に

ても唯心若くは唯物と稱して『唯一』を標榜する者は多くは過まてる者なり、昔の唯心論者は(佛教の哲學者の如く)主張すらく百物は皆摧いて以て空無に歸せしめ得べしと、思へらく茲に一枝の珊瑚あらんに鐵鎚もて之を打て打ちぬけば遂に碎けて微塵と成り、打てば愈よ細かく果は全く消え失するに至ると、是れ唯心論の堅城鐵壁と頼める議論にてありき、然れども其全く碎けて微塵となるは是れ消滅するに非ず、只元素に還元する者なる而已、唯物論者はまた之と反對の過を犯せり、彼等は肉眼に唯物質を認むるが故に、宇宙には惟物質あるのみと速斷したり、然れども物質のみにては如何にしてか能く精神的動作を生ずるを得んや、

宇 宙 觀

天地世界の實相一萬有實體論

但し中江氏は必ず之を遮りて言はん、物質外に靈物ありとは、正に是れ宗教に魅せられたる論者の妄説のみ、余が斷然之を排斥したるは即ち迷信を脱して大悟を開きたる所にして、中江哲學の獨り勝ぐれたるは茲にこそあるなれと、嗚呼果して然る乎、不本意ながらも余輩は再び此に學術的研究法を持出さざる可らず、如何となれば哲理を講究するにも亦其方法は學術的(scientific)なる者たらずんば有るべからざる故なり、常識的推理法は其價值極て少なきを奈何せんや、例の床屋哲學は三文の直打もある事なからんとす、余輩は決して獨斷的に(dogmatically)反對説を主張せんとするに非ず、又決して敵手の弱點につけいらんと欲する者に非ず、一に精神は青天白日の如くなら

## 宇 宙 觀

んを期す、一に論法は公明正大ならんことを誓ふ、若し斯の如くならずんば徒らに劇談に奔り詭辯に流れて毫も江湖に益する所なからんとすれば也、但し上にも言ひし如く常識なる者は、亦一に「健全なる悟性」と稱し來れるが如く、往々にして又其思惟の健全なる大いに稱すべき者なきに非ず、蘇國一派の哲學者が常識哲學を主張せしも實に之が爲なり、故に中江氏に於ても常識を師として云々する所には屢々一顧を價ひする言説の散點する者あるを見るぞ喜ばしき事なる、例へば中江氏は『世界』を論ずるに方りて實に左の大斷言を爲しぬ、

『前章では宗旨家及び虚靈派哲學者の説を駁して、反對に靈魂の死滅

## 天 地 世 界 の 實 相 一 萬 有 實 體 論

と肉體の不滅並に神の有るべき筈は無いといふことを論道したが、本章に於ては、更に又世の所謂現實派哲學なる者を駁せねばならぬ、此一派の哲學は、佛國サンシモンより濫觴し、オーギュスト、コント之を唱道し、従前虚靈派の説を駁倒し、一切幽怪詭幻なる想像に假借せずして、凡そ唱ふる所は、一々實驗を以て之を確めんとするのが、此派の特色で有る、又各種科學、殊に理、化、數、天文、生理、社會の六つの者を以て重なる學科と爲して、之れが刈穫したものを綜合して、即ち其所謂現實派哲學を組織するのが、此派の特色で有る、故に此一派に屬する者は、皆宏覽博物の學士で有つて、専ら詩韻的想像力を資實とする虚靈人士とは、大に選を異にして居る、即ちリットレーの如き、此派に浸淫した人で、博識匹儔無しと稱せられ、此派の説を傳ふるに於て、尤も力が有つたと稱せられて居る、

斯く論する時は、此一派は極めて確實據る可きが如くに見えるが、其現實に拘泥するの餘り、皎然明白なる道理も、苟も實驗に徴し得ない

者は、皆抹殺して、自ら狹隘にし、自ら固陋に陥りて、其弊や大に吾人の精神の能を誣いて、之が聲價を減するに至るので有る。是れ正に此派に於て放過す可らざる缺失で有る。

此輩輒ち曰ふ、世界は無限で有る乎、世界は如何なる原因で出来て、如何なる原因で終る可き乎は、是れ吾人の容喙す可き所ろで無い、千數太陽が旋纏する太虚の一隅に屏息する此太陽系の、其又一小球の住民たる吾人々類が此くの如き間に遇ふて、如何の答を與ふ可き乎、若し漫然之れが答を與ふれば、借に非ざれば妄で有る、我現實派哲學の本旨に背反するので有る云々、其意蓋し此等の事は、彼の理化、數、天文、生理、社會の六科に由りて檢證し得ないが爲めに到底確實の答を爲す可きに非ずとの考で有る、

惟ふに今日世の中の事、必ず目視て耳聴き科學檢證を経たるもののみ確實で、餘は悉く不確實だと云は、道理の半以上は抹殺せねばならぬことと成り、極て偏狹固陋の境に自盡せねばならぬことと成る、

且つ日常の事、必ず有り得可きもの、又は必ず有る可らざるものは、皆直ちに人言を信じて、必しも檢證を施さないで、夫で已れも許し人も許して、而して眞に確實で動す可らざるものが幾何も有る、且つ縱令ひ科學の檢證を経ずとも、道理上必ず有る可き、又有ざる可らざる事も、幾何も有る、即ち世界が無限で有ると云ふ事の如き、設令ひ科學の檢證が無くとも、限極が有ると云へば、大變大怪大幻詭で有ると謂はねばならぬ、世界とは唯一の物で、凡そ容れざる所ろ無いもので、有も容る可く、無も容る可く、空氣も容れ、依天兒も容れ、太陽系天體も容れ、千數太陽系の天體も容れ、若し此系の外真空界なりとせば、此真空界をも容れて居る筈である、此くの如きものに限極のある道理が無い、若し限極ありとの科學の檢證があつても、信す可らずでは無いか、何ぞ現實派の想像は怯懦なる哉と謂はねばならぬ、

嗚呼是れ何たる大雄辯ぞや、嗚呼是れ何たる大覺悟ぞや、或る意味に於ては如何に熱心なる自然神學者といふと

も造物者の大能を稱揚するに是れよりは壯んなる能はざらん、而して中江氏に取りては聊か自家撞着の嫌なきに非ず、然し乍ら是れ亦徹頭徹尾常識論者の口氣なる耳、但し中江氏は啻に然く熱心なる自然學者めける言辭を、呶々と吐露すること時に或は有るのみならず、又精神な、る者の妙用を問、喋々極説するをさへも辭せざらんとす、請ふ左の大文字を熟讀し見よ、

『夫れ……目は視、耳は聽き、鼻は嗅ぎ、口は呼び、手足皮膚は捕捉し、行歩し、觸接し、又感覺し、思考し、斷考し、想像し、記憶する等、皆精神の發揮である、炭より發せる燄と一般で有る、薪より生ずる火と同様で有る、抑も炭は小塊の聚りに過ぎないが、是より發する燄は或は天を焦がすに至る、薪は山木の斷片に過ぎないが、是より生ずる火は或は一都を燒燼するに至る、精神の軀體に於けるも亦此くの如くで有る、彼の

推理の一方を看よ、此理より彼理に赴き、層累して上りて乃ち十八里の雰圍氣を透過して、復に太陽系天體の外にも馳騁するでは無いか、想像の一能を看よ、其働らきは更に自由自在で、或は天上に都市を建立し、海底に樓閣を幻出し、虎に翼を傅け、狐を馬に乗せ、劍山を峙だて、血海を湛へ、何を爲して成らざる無く、何を欲して得ざる莫く、而して是れ皆五尺の小軀體から發する作用に外ならぬのである、記憶の能を看よ、三四歳の幼時に見聞した事物より、六十七十の高齡に至る迄、凡そ其經過せし事の意象は一々蓄へて逸しないで時に應じて引出さるゝで無いか、又一時我記憶より逸去したものが、思考の末再び浮出さるゝ、杯は、隨分奇な事では無いか、雷此れのみでなく、吾人の知識の進歩し行くは記憶の能が有て、凡そ經驗して得る毎に、腦中の倉庫に仕舞ひ込みて失はない、以て溫故知新の材料と爲すからで有る、即ち人の賢愚の別は、其大部分に於て記性の強弱に關係して居る、

其他感情や、感覺や、斷行や、皆精神の發揮の種類で有る、夫れ若干元素の抱合より成れる五尺の軀から、此くの如く燦爛たる金碧の光彩が放たれて居るので、昧者は此光彩を認めて本體と爲し、主人と爲して五尺軀を以て奴隸と爲して、彼の虛靈説の囁語が出来たので有る、夜光珠の光が餘り美麗なるが故に、珠よりも光が貴ばれて、光てふものが、珠を離れて別に存在して居ると思ふたのも、稍や無理も無いと云ふても良い、

此くの如く精神即ち軀體の作用は、軀體より發しながら、之れが本體たる軀體の中に局しないで、十八里の雰圍氣を透過し、太陽系の天體を透過し、直ちに世界の全幅を迄領畧するの能が有る、即ち吾人が宗旨家の卑陋の見を打破して、世界の大理を捕捉せんと擬するは、正に精神に此振拔挺騰の能力が有るから出来るので有る、是に於て乎、又古今哲學家の極めて思を覃し慮を勞する事項が有る、以下順次に論ずるで有らう、

嗚呼精神の能力何ぞ其れ大なるや、中江氏椽大の筆を揮ひ、不爛の舌を弄し、奇趣横生の文を以て精神のために、而も己が虚無視せんと百方務め試みつゝある其精神のため、めに萬丈の光焰を吐き出し來る、壯絶、快絶、唯惜むらくは其文情に強くして而して理に疎きこと、是また例に依て例の如し、

但し既に言へる如く此種の唯物説は決して珍らしからず、今唯物論の何物たるかを簡短に縮寫して、一般の讀者諸君が参考に資たすけたらしめんに、ウヰルキンソン氏は曰く、『按ずるに、哲學研究の極初より一種の論者ありて説を爲して曰く、萬有は之を追溯すれば、單箇の物質に歸す、而して各種の存在物の現象は盡く物質の極微分子即ち元子

に固有なる能力或は性質に由て起る也と、古今を問はず凡て此説を極端に進めたる人々は物質的原素の本性を大小形狀位置及び變化の四端に止め、而して萬有の諸他性格品質は悉く是等四種の本性より開發し來ると斷定し、其千差萬別なるは元素たる極微分子の排列結合の千差萬別なるに因ると主張せり、

此論の第一の困難は無数の分子の存在を説明するに在り、第二の困難は其無数の分子が運動し互に相結合して交互の動作に要する條件(狀勢)を形くるを説明するに在りとす、此説を持する古今の理學者は共に物質の分子が自然にして永久に必然に存在すとの臆説(假定説)を採れり、如何となれば此説たるや造物主あるを信せず、又造物主が萬物の創造形成に直接關係せるを信せざる者なるが故なり、蓋し今日世人が物質に歸する如き本元の諸性質を具備せる實質が一つ

も存在せざりし時ありしとすれば、此の如き物質は全能者——眞箇に全能にして爲す能はざる所なき神——が其意志を運用して之を創造せんとせしに非れば到底生起する事あたはざればなり、獨り自ら忽然と顯はれ出たりとは如何にも思想するを得ざるなり、

古昔の唯物論者は謂らく、運動力——是なくば宇宙の分子は凡て永久隔絶分離して獨立の元子たるべき此運動力——は是等の元子と共に永久に存在し、且回轉するの性質を有す、故に其諸元子互に相結合して現在の狀を呈する也と、アリストートルは其形而上學(第一編三)に於て此臆斷を冷評し、斯の如きは運動の理由を闡明するに力なしとして、痛く其論者を罵倒し、而して彼自己は有ゆる物質の根本を至上至大なる靈知(神或は造物者の類)に歸する哲人

を稱揚し、彼等こそ眞に萬物迭運の眞原因たるべき原理を論定したる者なれと歎ぜり、

エピキユラフは運動を解て曰く、是れ元子(原素)たる分子が重力のため、に空間に於て絶えず降下するの必要より生ずる者なりと、是全く「上」下「登」降等は比較上の名稱たるを知らざるの妄想なり、重力は何れの方面に於る運動をも解明するを得ざる者、否な重力は何の運動をも説明するを得ざる者なるを知らざるの妄説也、且又此説たるや並行線に於る運動を謂ふ者にして、毫も分子の會同若くは結合を説明するに足らず、然るに此會同結合なき時は物質は其最初の形體を成すと能はざりしなり、エピキユラスも亦此事を知れり、故に彼は亦説を爲して曰く、或る分子は其降下するに當りて少しく其行路を轉じて他の分子と接觸するに至れりと、然れども其何故に斯く行路を轉じたるや、何處に如何に何時然かせしやと云ふに至りては何の原

## 宇 宙 觀

## 天地世界の實相一萬有實體論

因たるべき者も無りき、又彼れの持説によれば何の原因をも之がために與ふるを得ざる也、エピキユラスが全體の哲學説は道德と物理とを合せて共に此未熟生硬の臆説に基けたり、實に此臆説たるヤシセロが正當に呼稱したる如く「小兒らしき妄想」なり、荒唐不經の迷想なりき、豈深く考ふるに足んや、

現今の唯物論は、开が作俑者たるラプラスの語を借て之を言へば、大凡そ左の如し、曰く、最初物質は雲霧の狀に於て存在し、遍なく宇宙に漫散し、るたるが故に、其有るや無しやは殆んど見わけらるゝ能はざりき、而るに重力の作用により、又は相互の牽引によりて、許多の凝結中心(凝結中心)生じ、其周圍を廻る許多の帶(帶)起り來り、其帶たる者後に分裂して衆多の別々なる球體と成れり、而して宇宙の諸元子の



衝突及び凝收は猛烈の熱氣を起し來りて、終に其凝收せる團塊を鎔解せしめたるが、後に又發光作用(火熱が光輝となりて發散する事)のために段々と冷却して固結し、終に今日見るが如き固形體を爲すに至れるなりと、

此説も亦エピキュラスの臆説を同じく物質と運動とを説明するに足らず、何となれば如何に其星霧星雲或は星雲星雲は漫散しむればとて、开が別々の元子にて成立ちたるは争ふ可らず、而して其別々の元子は各若し自然にして永遠に存在せる者ならざれば、必らず創造せられたる者ならざる可らざれば也、而して重力(引力)より起る運動力は或は其分子の團塊(結合體)に固有なる、随つて必須なる永遠同存する性質たらざる可らず、若くは又或る他の獨立なる者ありて之(運動力)を彼に與へたるならざる可らず、第一の場合に於ては、今日の森羅萬象を生じ來りたる變化は如何にして其端緒を開きしやを曉るこ

宇 宙 觀

天地世界の實相一萬有實體論

と能はず、第二の場合に於ては、物質は其最初の状態と異なる状態に投せられたる也、即ち其初に有たざりし性質を與へられたるなり、但し此變化は何處より來りしや、如何にして生せさせられしや、最も未審と謂はざるを得じ、

長逝して坏土の未だ乾かざる大生物生理學者ハクスレ  
 氏は唯物的傾向を以て有名なりし人なるが、彼すらも其生命の物的基礎基礎てふ論說中に明言して曰く、『宇宙には物質物質と勢力勢力と必然必然の三者のみにして、他に一物も之れ無しと主張する如き唯物論は、全く妄斷不當の言にして、其根據なきや神學上の獨斷言と伯仲すと謂はざる可らず、云々、蓋しハクスレー教授の如きは、諸元素(炭水酸 窒素等)を抱合せしめて生命を自發的に(親の産出を 借らずに)生産せんと試みつ、全

宇

宙

觀

然失敗したれば、自然に斯る告白を爲したる者なりとす、  
 ウキルキンソン氏又曰く、『余輩もし萬有を約して物質的  
 根本に歸せんと試るならば、却て唯物論の基礎を覆へす  
 所の結論に歸着し、終に其反對たる唯心論を以て之(唯物  
 論)に代るに至らむ、彼の物質及び勢力、即ち彼の分離す可  
 らざる複合物——唯物論にて是なしには一物も存せず、  
 此の外には一物も在るなしと唱る所の物質及び勢力——  
 |を熟察すれば、我輩は物質の各分子が物質たる所以は、  
 其延長不透(礙質)可動の屬性を有するが故なるを見る、是等  
 の附性(アットリピット)の中最後の二つは勢力(エネルギ)に歸すべ  
 き者にして、實に勢力の發現に係る、然れば純粹の物質は、  
 只勢力を附與せられたる、延長(幾許の高廣長短等を有す

天地世界の相一萬有實體論

る事たるのみ、但し若し物質に必須なる者は只延長のみ  
 なりとせば、物質の各分子は只一小部分の空間たるのみ、  
 斯の如く物質てふ觀念は全く消滅し去るべし、若し又物  
 質は延長、不透、可動等の屬性を以て顯はる、い、一種不知の  
 物なりと云はんか、然らば吾人が物質を物質と知るは只  
 是等の附性に由るのみなれば、其下に隠れたる眞躰は何  
 なるにもせよ、物質には非ず、却て、一種不可測なる虚靈な  
 る者ならざる可らず、  
 有名なる佛蘭士哲人ポウル、ジャネ(Jane)氏は其著述に係  
 る獨逸現今唯物論中に於て此の結論の自然にして免る  
 可らざるを辨明し、且其關係の重大なるを詳論せり、其一  
 段に云ふあり、曰く、

論者もし細分子自身は物質の原素に非ず、細分子の外に或る物あり、此或る物は絶待的にして獨立なりと言はゞ、余は答へて曰ん、是れ誠に然もありなん、但し然る時には是れ唯物論てふ者を捨て、他の假定説を取る者なるを奈何せんや、夫れ元子は物質の最極顯現躰にして、此上には最早や剖析す可らず、之を逾えては思量す可らず、若し元子より上へ更に歩を進めたる物あらば、并は他物にして物質に非ず、是れ只抽象的思想を以て思量せらるべき別物のみ、余輩思ふまゝに或は之を觀念と名け、或は之を實質と名け、或は之を勢力ポテンチと名けん、然れども其物質ならざるは争ふ可らず、物質は五官に感得せらるる者を謂ふなり、五官の及ばざる者、經驗の

届かざる者は物質に非ず、凡そ物躰と稱する者に就ては余は其中の若干の品性を分解して他の若干の品質に還元するを得べし、例へば第二の品質を第一の品質に還元するを得、臭味色を形状及び運動に還元するを得べけん、凡そ我が五官を以て感得し得る者の残りを、其物は尙物質なり、凡そ物を指して是れ形躰なり物質なりと云ふは、其物が五官を以て感得せらるる原素と多少同様なる原素に還元せらるるを謂ふ者とす、之と同じく五官を以て感得せらるる者にして、單に現象たるに止まらば、凡て是れ只現象たるのみと言はん、若しまた五官の感得物の基礎にして全く其物と異なるならば、此感得物レラ（即ち物質）は只待對的レラにして、一層高等

なる眞躰に還元せられん、但し其眞躰の勢力及び價値は最早五官を以て思量す可きに非ず、然る時には物質は更に其上に位する高等なる者の中に没入し、隨て唯物論は唯心論に其地位を讓るに至る也、

此結論は唯心論のために物質の存在する者に非るを證明せんとて呈出せられたるに非ず、却つて斯く唯物論を自家撞着に推詰たる推理は五官の證驗に本く者なりとす、五官は外より物の來りて之に觸るゝあるを報道す、而して吾人は此の如く外物を感得して其眞に身外に存在するを信ず、但し余輩が主張する所は是なり、曰く余輩は縦たや唯物論の原理及び前提を追て論ずとも、物質は獨立なる存在を有つ者に非ず、却て他物の中より出來りたる

者なりと信ぜざるを得ず、而して物質が由て出たる所の物、物質が依て存立する所の物は、是れ物質に非ず、余輩は勢力の例を持出して此に喋々するを要せず、唯物論者も皆勢力の獨立して存在せざるを認め、且つ勢力の無き物質のあらざるが如く、物質なしには勢力あり得ずと斷言する也、勢力も亦物質の如く、依デペンデント他的小にして且つ化出デアライヴ的なりとす、即ち是は勢力ならざる物の中より起れる也、勢力に重學的ヘカトメ（勢力的）基礎あらざるは、物質に物質的基礎あらざると一般なり、

斯の如く唯物論は、物質、自身を、説明すること、能はずとせば、余輩はジャネ氏と同じく斷言して曰んとす、

『唯物論は物質自身につきてすら既に然れば、況んや宇

宙の二大奥秘——生命と思想と——をば其解き明か  
し得ざることを昭々として明らか也、

宇 宙 觀

偕此の如く極端なる唯心論と云ひ、極端なる唯物論と云  
ひ、俱に到底立つ可くも非ず、名詮自稱、極端てふ文字、其物  
即ち此等兩説の均く正鵠を失せるを告白する也、是に於  
て乎、兩者の調和融會、自然に其萌芽を現はし來りぬ、  
印度に於ては、佛教哲學者夙に諸法實相といふ妙義を唱  
へて、識空の兩極端を調諧せんと試みたり、之を中道觀と  
稱す、余輩嘗て竊かに此の義を講究したる者あれば、之を  
左に掲出せんと欲す、

も、此臻極之眞實に達すれば、則ち一なり、彼の圓頓一乘の  
妙説と雖も、亦別異ならず、圓教は性海圓明法界緣起無礙  
自在、一即一切、一切即一、主伴圓融するの義を示せど、是亦  
實相の外に出でず、密教の所謂自性受用身佛の妙義語も  
亦實相と違背する所なし、密教説に云ふ、自受用佛、從心流  
出、無量菩薩、皆同一性、謂金剛性、と、又言く佛法中、眞言惣持  
最第一、唯眞言中、即身成佛、と、是の如く論じて、密宗は金剛  
界の義を示さんと試む、而して其所謂る金剛界は此世等  
を悉く金剛不壞の佛身と爲すの義にして、即ち畢竟諸法  
實相と異なる所なし、  
提婆菩薩曰く、我實相中、種々法門説有、無皆空、と、龍樹菩薩  
細かに之を論じて云く、——

宇 宙 觀

諸佛或說我、我、我、諸法實相中、  
 無我無非我、諸法實相者、心行言語斷、  
 無生亦無滅、寂滅如涅槃、一切實非實、  
 亦實亦非實、非實非非實、是名諸佛法、  
 自知不隨他、寂滅無戲論、無異無差別、  
 是則名實相

又智度論に曰く、諸法不生、不滅、非不生、非不滅、非非不生滅、  
 亦非非不生滅、既得解脫、非空、非不空、如是等捨滅、諸戲論、  
 言語道斷、深入佛法、と正に是なり、故に大乘終教の經論と  
 雖も、實相の何物たるを解説する者なし、是れ其所謂實相  
 は一相にして無相なるが故に、佛もなく、解脫も無ければ、  
 なり、是故に佛も亦說法せしこと無しと論ぜざるを得ず、

天 地 世 界 實 相 一 萬 有 實 體 論

即ち龍猛菩薩が般若燈論に言へるが如し、  
 彼第一義中、佛本不說法、佛無分別者、  
 說大乘不然、化佛說法者、是事則不然、  
 佛無心說法、化者非是佛、於第一義中、  
 彼亦不說法、無分別性空、有悲心不然、  
 衆生無體故、亦無有佛體、彼佛無體故、  
 亦無悲愍心、

然ども是の如く一概に論じ去ては不可なる所多し、龍猛  
 と雖も然るに非ず、唯一應の理を説て佛法の妙を示さん  
 とせる也、彼の勝鬘經に説ける自性清淨心難、可了知、彼心  
 爲煩惱所染、亦難、可了知、と言ふ妙理は不言を以て示すの  
 み、言語の及ぶ所に非ずとて、是に於て乎以心傳心、教外別

傳等の説あるに至りぬ、大梵天王問佛決疑經に云く、

梵天王、一時、至靈山會上、以金色婆羅華獻佛、請佛爲群生說法、世尊登座拈華示衆、瞬青蓮目、人天百萬悉皆罔措、獨金色頭陀大迦葉破顏微笑、世尊言、吾有正法眼藏、涅槃妙心實相無相微妙法門、不立文字、教外別傳、分付大迦葉、

是の如く諸法實相は心識及び五官を超絶したる妙境なりとす、泰西に於ては其調和の模様果して何如ん、

上に絮説せる如く、宇宙觀或は實體觀は、唯心論と實有論との二種に大別せられ、其一是靈的一元論に流れて唯靈論と成り、他の一は物的一元論に奔りて唯物論と成りたりしが、到底此の如き極端なる一元論を以てしては満足

宇 宙 觀

天地世の實相一萬有實體論

に宇宙を説明する能はざりし故に、早くも此等兩哲學系は、其哲論を行るに當りて、各々五官を超絶するに至れり、之を一は超絶的唯心論(Transcendental idealism)と稱し、一は超絶的實有論(Transcendental realism)と稱す、曰く、一切の現象は皆悉く實體を其裏面に有す、然れども其實體は五官を以て知覺す可らず、吾人は只开が吾人に向ひて有する關係に由て之を知る而已、換言すれば、吾人は感覺の總合に由て外界の現象を知り得る而已と也、此の定義は始んど此等兩系に通ずる者とす、大カントの批判哲學を稱して超絶的唯心論と曰ふ、如何となれば、是れ森羅萬象を單に空華とは見做ずして、开が裏面に何等か不可覺の實體を有すと認められたれば也、

宇 宙 觀

但し唯心主義が進んで、或は寧ろ退いて、茲に至るや亦是れ實有論リアリズムの領分に踐ツミいれる者にして、最早純乎たる唯心主義に非ず、實は是れ實有的唯心論 *Realistico-idealism* とも稱すべき者なりとす、是の如く實有論が超絶的なる者となるや、亦是れ唯心論の經界を踰ユえたる者と謂はざる可らず、斯る實有論を亦唯心的實有論 *Ideal-Realism* と號す、是に於てヘーゲルの如き大思想家は心境ココロノキョウ（即ち物我の究竟同一を盛んに唱へたり、之を兩異の大同一 *Identity of non-identities* と稱す、是即ち夫の有名なる大同一元哲學 *Philosophy of Identity, Identitaetsphilosophie* なりとす、

然れば獨逸最近の一大哲學者ハルトマンの如きは公然と超絶的實有論を唱へ、之を以て己れの究竟主義と爲せ

天 地 世 界 之 實 相 一 萬 有 實 體 論

り、曰く、カントの超絶的實體説は心思目見的物形の妙義（超絶的意義）を看過するが故に、未だ可ならず、之に反して吾が超絶的實有論は斯る妙義を認め、而して確言す吾人の觀念は敢て實體の寫眞なりとは謂はず、只實體たる原因の影像のみと、

此の如く今や諸の哲學系皆悉く不見不聞の實體モノてふ者を認識するに至りぬ、只此の實體は果して何と呼ぶべき者なる乎と云ふに至りて議論紛々たる而已！此實體なる者は——宇宙の萬象が悉く一致同轍なる處より推せば——唯一なる者と認めざる可らず、是即ち萬物の根本なり、之を或は太一と言ひ、或は道と言ひ、或は第一原因と言ひ、或は不可識境セルペン（*Serpent*）と言ひ、或は梵天印度グエダ（*印度哲學*）と言



ひ、或は大觀念(トブラ)と言ひ、或は實在者と言ひ、或は天帝と言ひ、或は眞神と言ふ、皆是れ人々の隨意のみ、只其必有は今や之を否定し得る者なからんとす、是れ哲學の一大進歩と稱揚せずんば有る可らず、但し本章は既に長きに失す、更に章を改めて尙論ずる所あるべし、

### 第十四章 有神觀と無神觀

凡神論(萬有即神論)と一元論

按ずるに、有神觀は自然に、唯心論と親密の關係を有し、無神觀は必然に、唯物論を以て根據とす、先づ後者より説き始め、無神論の主張は古來甚だ單純なる者なりき、曰く、一切の物體は若干の原素相親和抱合して之を形つくれる者にして、其等の原素たるや無始より自然に存在したれば、別に造物主の干涉を毫も要する無しと、然らば其等の原素は如何にして互に相結合するに至りたるやと尋ぬるに、唯物論者は又曰く——否な、希臘の一大哲學者エピキュラス(Epicurus)を祖述せる羅馬の

## 宇 宙 觀

哲詩人ルクレチウス (Lucretius) は其天地人三才を詠ぜる  
 哲學詩『萬有』 De Rerum Natura 中に於て、衆に代りて答て  
 曰く、——『宇宙間には無數の極微分子充ち滿ちつ、其の重  
 きが爲に常に下へ下へと降りつゝあり、而して其接觸衝  
 突するや必ず相跳ね還り、相飛び躍る也、但し其唯斯く眞  
 直に降る而已にては互に相結合するの機會焉んかあら  
 ん、是に於て乎此等衆原子はまた其下降するに方りて少  
 しく横へ傾き落つる趨勢を有し、之に由て彼此接觸結合  
 するを得たり、而して其相合する密なる物は重く且堅く、  
 其相結ぶ疎なる物は軽く且柔かし、原子の此運動は初よ  
 り今に至るまで依然として渝ると無し、斯く無數の原子  
 が無極の空間を飛動する者は、無數の世界を生じ來り、一

## 有 神 觀 と 無 神 觀

切の動植物これより生ず』云々、  
 上古は斯の如き説明も一時は人心を満足せしむるに足  
 れり、其餘は前章に引きたる中江篤介氏の放論高談の如  
 き類に外ならず、併し乍ら是等は舊式の唯物論に過ぎざ  
 れば、今聊か順序を立て、之を説かんに、世界の狀相は決  
 して然か單純なる者に非ず、千差萬別の現象森然として  
 羅列す、今ウキルキン氏の語を借りて、之を言んに、『廣く物  
 に就て觀察するに、耳目口鼻身を以て知るべき物體は大  
 抵複合物にして、種々なる物質(即ち元素)の結合より成り、  
 且其結合より生ずる若干の品性を有す、併ながら萬物が  
 由て成立つ所の元素は大抵既に發見せられたるが如く  
 にして、其數さのみ多からず、是等の原素は皆單純なる者

## 宇 宙 觀

なり、而して其品性たるや、或は他物と同一なるも有るべけれど、皆其物自身の品性として之に屬するなり、我等出得べきだけ存在物の根本を究めんがために、若し是等の原質が其最微の部分に於ても等しく普通に保有つ所の者——は無れば其物物質たるを得ず、是あらば直に其物を物質と稱ふるに足る性質——は何なるやと尋ぬるに、凡て延長、可動、不透の三性を有せざるは無し、即ち凡そ物は物體たらんには幾分か空間を塞がざる可らず、一處より他處に動かされざる可らず、其の在る處には他物の入る能はざる者ならざる可からず、但し此にては余輩は是等の延長性、可動性、不透性が物體を構造すと言はず、又思はず、否な余輩は却て物體は延長、

## 有 神 觀 と 無 神 觀

可動、不透の三性を有すと言ふなり、吾人は尙其物の何なるを知る能はず、併ながら是れ所謂物質(matter)にして、五官に感得せらるゝ物體の一般の基礎を形くる者なるは知られて明らかなり、余等今より進んで此の到る處に見るべき眞體の性質構造を發見せんとして近頃呈出せられたる議論を吟味せんとす、然れども是に先だちて此に預め觀察せざる可らざる者あり、抑も吾人が五官を以て感得する物象の大部分は自動的物體、即ち生物にて成立り、彼等生物は其最下等の形體に於ても機體を有し、又飲食し、成長し且つ子を生むの能力を具す、是れ他の物體と異なる所なり、彼等は皆複合物體にして、凡て同一の諸物質を以て成立てり、然るに

其物質たるや是等の能力(飲食發育生産等)を有せざる者なる事論ずるを俟ず、

吾人は各生物の物質的成分の如何を知ると雖も、生命を以て是等の成分の結合に歸する能はず、斯の如き結合は或は生命に必要ならん、然れども此結合は生命を構成せず、また生命を生産せざるなり、大博物學者佛人キウピエIの語に云く、

「生命が生物の身體を成す所の諸ろの原素の上に働く所は生命なしに化學的親和より生ずる所に反すれば、生命が是等の原素の化學的結合親和の中より生ずるを得ると云ふは事理に合はざる妄説と謂はざるを得ず、」

### 有 神 觀 と 無 神 觀

是故に生命は生物を組成する物質若くは其等の物質の親和力の集合して成れる者とは考ふる能はず、是なほ物質が其諸品性若くは勢力の集合體に非るが如し、生命の秘密は單純なる存在物の秘密と同じく悟入すること能はざる也、

但し存在中の最も不思議なるは精神なりとす、精神は生命を含蓄す、併ながら生命は一切の物質と必ずしも同存する者に非ず(例へば無生物の生命なきが如し)、斯の如く精神も亦一切の生命とも同存する者に非ず、而して生命は諸生物の中に必ず發見せらるゝ諸ろの原素の集合若くは動作として解去る可らず、又之に由て生ずる能はず、斯の如く又精神は凡て思想力を有する存在物の體

## 宇 宙 観

中に發見せらるゝ物質性質及び勢力の結合若くは動作として解去る可らず、又之に由て起る能はざる也。精神は必らず或る組織體或は機體と關係し、亦必ず飲食發育及び生殖の能力を有す、併ながら是等を以て思想の發生開暢運用に必要な者缺く可らざる者と考へ爲すは難し、是等は或は精神を有する物質的存在物の存在するに必要な條件ならん、或は精神自身の存在に必要な條件ならざらん、抑も思想なる者は其最も無造作なる意志の運用又は取捨の決斷何か事を爲んとし又は何か物を撰ぶ事に於てすらも決して活物質(生物の肉身は即ち活物質)の生産物に非ず、若し然らんには是れ聲香臭味觸の範圍を脱せざる者なればなり、然るに誰か古來能く

## 有 神 観 と 無 神 観

思想を見わけしや、嗅わけしや、聞わけしや、又思想は搖擺震動の如き物質の運動に非ず、如何となれば物質の運動若くは震動盡く思想なるに非ればなり、例へば灰白軟肉腦の如きは思想の機關たるのみ、思想自身には非ず、故に只に機械的なる運動或は震動を以て彼の思想と同時に發する或は思想と同一なる所の働に比ぶれば其間に大いなる逕庭ありとす、是に由て觀れば思想を形るに要する者は唯に運動若くは震動のみに止まらざること自ら明かなり、抑も凡て五官を以て感得せらるゝ物の下には物質てふ者臥す、凡て有機體なる物の下には生命てふ者臥す、此の如く思想の下には精神てふ者臥す、吾人の經驗によれば生命は必ず物質を俟ち、精神は生

命及び物質——即ち活物質——を俟つて存す、然れども生命と物質の關係因待は必然なる者に非ず、即ち其關係たるや因果の如く之を物質的原素の作用に追溯する能はざる也、生命は物質の外に獨立す、之と同じく精神が生命に對する關係も觀察し來れば必然なるに非ず、精神は唯の生命に由て存する者に非ず、又生命の効用若くは作用にも非ず、精神も亦生命物質を離れて獨立する者なりとす、

### 宇 宙 觀

余等は此に諸存在物に普通なる一屬性或は固有性を考へざる可らず、是すなほち質力エチルキ(Force)てふ者にして、存在物の原素としも稱せらるべし、有機體の運動變化及び其相互の牽引並に化學的親和の作用等が由て行なはるゝ者

### 有 神 觀 と 無 神 觀

は此質力なり、有機物の生長發育生殖及び自動は凡て質力に本づく者にして、此質力を他の勢力と區別せんが爲に、生命的質力(vital force)と名く、此外、精神的質力(mental force)及物質的質力(physical force)あり、各々其本領を異にす、然ども此三を凡て質力と稱す、其質力たるに於ては三者とも異なる所なし、

今質力が此等存在物の三類——單純なる物質的存在、生命、及び思想——に對する關係を考ふるに、生命的諸能力は生命を有つ物の中に存すれば、生命を有つ物の使用する所として之を思想するの外他に考ふべき無し、又精神の諸能力についても思想の諸能力についても同じく然り、共に精神に固有必要なる者として見らるべきのみ、然

宇 宙 觀

れども物質的質力は之に反して實は是只物質的存在のみを有する物の外に獨立すべしとも思想するを得べし、實に重力、引力、却力等の如き質力が物質のために固有必須なる力として獨立に所有せられ使用せられ得るとは如何にも思想し難し、其實は物質が此等質力の作用に服従するは其惰性の然らしむる所なりと謂ふべし、凡べて唯の物質或は生命なき物質は、物理學上の計算に於ては——例へば重學若くは天文學に於ては——外より刺激せられ、或る勢力を加へらるゝに非れば獨自ら運動する能はざる者、變化する能はざる者と論定せられざる可らず云々、

以上の言議に由て余輩は宇宙に二大存在の認むべき者

有 神 觀 と 無 神 觀

あるを知れり、即ち物と靈と是なり、前者は敢て死物と言ふに非ず、或る意味に於ては活物なれども、眞箇の所謂生命なくして、自ら活動するの力を有せず、其積聚して成れる金石等の類に徴して明白なるが如し、後者は全く之に反し、己れに活動力を具有す、換言すれば、前者の有する力は質力の方に屬し、後者の有する力は靈力の方に屬す、前者は有形延長 (extension) を以て性とし、後者は無形運想を以て性とし、此の區別は甚だ古き者にして、亦吾人が觀察實驗の届く限り必在なる者とす、

若しルクレチウスの如き哲學者輩の主張する如く、其物質たる原子 (極微分子) 相動き相結びて萬物を構成したりとせば、此の惰性なる (inert) 物素如何にして初め動き出したる

宇 宙 觀

や、是れ吾人の觀察經驗に戻る不可測の妙事實(蹟)に非ずや、是を以て、近頃の大物理學者ボワ、レーモン(Du Bois Raymond)教授(人獨逸)は、宇宙に於ける斯の如き運動(motion, Bewegung)の起原を稱して、世界、七大、不思議、或は宇宙七謎(Die sieben Weltraetsel)の一と爲せり、曰く、『若自然以上の動因ありて吾人の思想界に起らざりしとせば、然らば極初の運動は如何にして起りしかを説明すべき十分の理由に乏しと謂はざる可らず、然らざれば吾人は物質が無始より已來動きをりたる者と認定せざる可らず、進退兩難は茲に存す、因て余輩は此の點に於てや全く無知に安んぜざる可らず、如何となれば此の困難は人智以上に超越すれば也。』然り、科學的實驗内に踏止まりて、空想妄斷に奔らざる

有 神 觀 と 無 神 觀

以上は、吾人然か明言告白せざるを得ず、是を正當着實なる論法とす、若し學理外へ躍り出だして想像を逞ましうすべくんば、何の事か言はれざらんや、烏を白しとも鷺を黒しとも、縱肆に説かる可けん、  
 生物の起原に至りても亦此の如し、惰性無命なる物質(原及元素)を合して其形を成せる生物は、其生命を最初何處より得たりしや、唯物論者は、隨つて無神論者は、斷言すらく、生物は必ず親ありて生るゝに非ず、天地の養氣網縊するや、衆生物蒸出し來る耳、試みに醋或は酒を瓶中に注入し置き、而して數週又は數日の後に之を検せよ、必ず許多の生物を其中に視ん、水を瓶に入れおくも亦然り、縱や之を密封しおくも、華氏の七八十度に熱するや、忽ち許多の生



物を其中に生じ来るに非ずや、是れ生物自發自生(spontaneous generation, Urzeugung)の明驗なり、云々、

勿論此事實を假りに然りとしても、尙自生論に對して茲に一つの難關あるを奈何ともする無けん、即ち其、網、縊、生、か、ず、る、空、氣、は、誰、が、初、め、生、じ、た、り、し、や、て、ふ、難、問、是、な、り、但し余輩は今此點を追究せじ、只論者の主張する所に就て反問せん、諸公は夫の有名なるパスチウル(Pasteur)の實驗證明を忘れられたるや、此の大佛蘭士學者は、嘗に養蠶の領分に於て、微、菌、研、究、上、に、偉、勳、著、大、な、り、し、而、已、な、ら、ず、又生物自生問題上に於て、鴻、功、を、立、て、た、る、事、天、下、の、徧、く、知る所に非ずや、試みにシユキツェンベルゲル氏の好著醱、酵、論(Fermentation)を繙くも、バ、氏、が、實、驗、成、績、の、顯、著、な、る、者、あ、る

宇 宙 觀

有 神 觀 と 無 神 觀

を窺ひ見るを得ん、即ち生物は必ず其親の卵または胎より生れ出る者にして、自發自生は全く空想妄見のみ、是れパスチウル氏が一たび永久に驗證したる所なりとす、

(註) 此事を天主教のリギョール師と前田長太師とは其好著「唯物論と靈性論」中に問答體を以て説き出されたり、今、一節を左に抄録す、

野村(前署) 蓋し動物や植物は其大小如何に係らず、皆法則があつて生じ来るもので、決して偶然に出で来るが如きものではない、各種各類皆其生出する理由と其存在する道理とを有つて居るもので、動物ならば己と類を同うするお父つきん、おつ母さんあり、植物ならば又各々活ける種子萌芽等ありて生出して来るものにて、各自特別の種があり類がある、その種類を混同することは逆も出来ざるものである、ツマラヌ事を長く話す譯はないが、君先づ試に空に飛ぶ鳥、地に走る獸、海に泳ぐ魚を一々細かに調べて見給へ、是等の生物の中一匹片匹でも頑冥無覺なる物體所謂物塊よ

## 宇 宙 觀

三五〇

り生出し來るものはなからう、今日の實驗學、吾君の威張る所の實驗學は如何に妙手敏腕を揮ふとも、其一匹をも見出すこと能はざるは、僕の證券印紙貼つて保證する所である。」

天城「物體のみにして他に萌芽種子等の之に包含せらるゝことなくば、生物は決して生じ來るものにあらずと云ふ議論は明確なるものでんか、之に反對の議論は古今に之なきや。」

今井「今日之あり、進化論は即是れ之に反對なものでん。」

長田「順を逐ふて申上げなければならん、先づ第一遠き昔には如何なる議論があつたかと云ふ事を究めるは、話の順である。」

野村「哲學の泰斗アリストテレスは、『動物史』と題する大著九卷を後世に遺された、夫故に氏は動物學の鼻祖として仰がるゝ學者なるが、氏の説に據れば、『腐敗は物を産む』と云ふ事である、氏は之を主義として、切言せば、之を議論の出發點として、博物學を研究したる爲め、遂に左の結論を下された、曰く、『動物の中には同種類のものより生れずして、腐草敗土より産出するもの多く之あり、彼の蟲類の多くは皆然り、例せば蚕、虱等は、腐肉塵埃より湧き出で、魚類にしては彼の鰻の如き、亦是れ坭土より生ず云々』と。」

## 有 神 觀 と 無 神 觀

天城「是れ未だ博物學の幼稚なりし時代の説である、今日に至りては小学校の小供でも之を聞て笑ふなるべし。」

長田「アリストテレスと云へば、古來一番學理的の頭腦を有つた人なれば、氏をして若し今日に生れしめば、大に己の愚なりしを笑ふ可し、然し當時に在りては之を實驗する道がなかつた、氏も亦萬事を研究する道がなかつた故、間違つても先づ一怒して置く事出來ると思はれます。」

野村「豈嘗當時のみならんや、爾來長い世紀の間學者の眼は此點に傾注して居りませんでした、蓋し初めて狹義の實驗法を以て博物學の研究に應用しましたのは、佛國のレヂ（一千六百七十六年に生れ）と云ふ醫士でした、氏は其巧妙なる實驗法を應用して、當時の博物學者と共に、確固動かす可からざる證論を爲して云ふには、今迄知れ來れる生物は皆是れ一定の法則に依るものにて、孰れも皆同種類のものより生れ來る事は明瞭的確で、彼蟲類の如きに至りても亦皆然らざるはなし云々」

天城「然らば則ち長き世紀の間の學者達は、何故にアリストテレスの自生説を正直に信じて居りましたか。」

長田「それは今日の學者達と同じく、是を一の假定説として採用して居つ

たので、ムる、當時或る動物によつて其生出の道が精しく分らなかつたものが澤山あつた故、之を解釋するが爲め假りにアリストテレスの自生説を採用して置いたので、ムる。學問界にはイツモ斯の如き假定説はあるもので、其中或者は今日の實驗學之を採用し居れども、他の多くは皆之を放棄して居る、古來物體に就ての學説が千變萬化して來たと云ふも、ツマリ是等の爲でムる、然し茲に注目して置くべき事は、斯る自生説のやうなるものを正直に信仰して居つたのは、昔に中世紀の學者のみではなし、十九世紀の今日に於ても、多くの學者の中に、矢張り如斯説こゝなせつを正直に信仰して居る者は、中々澤山にある、是等の學者は人文進歩の現世紀にありて、自ら世の光の如き者と自負して居つたのを見れば、尙更に可笑いではムらんか、」

天城君は何を諷せらるゝか、愚老には一向解せぬ、」

長田、何に外の事でもムりませぬ、顕微鏡が初めて發見されましたから、極小極微の動物界が残らず照破されました、今迄人の眼に知れなかつた動物界まで發見さるゝやうになり、隨て其動物の生活状態に至るまで、一々綿密に研究せられたる現世紀に至りましても、或る學者の中では其起原

に就て種々様々のと云ふよりは、奇々妙々の議論を戦はせまして、動物を以て自生する云ふ事を信するばかりならば、まだしもの事、萬物の靈長と呼ぶるゝ人間様の御先祖は、是等自生の小蟲であつた杯と云ふ事を公然主張する者かあつたと云ふ事でムります、早く言へば、即ち後の進化論者杯を指すのである、能く考へて御覽じ、世は世で、學問の世、科學の世と云つて、昔の時代とは丸で變つて居り、人は人で、自ら古今獨歩の大學者なり杯と威張て居りながら、人間と云ふものは極少の所から時と共に發達變遷して、遂に今日のやうな進歩的の人間に化けて來た杯と云ふのは、如何にも馬鹿らしい事ではムらんか、是等の學者の說に據りますれば、人間が今日まで進化して來るには、馬となつたり、牛となつたり、隨分と面白き境遇を経て來たと謂はなければなりません、然し自分の勢力を以て進化して來たと云ふからには、餘程末頼母數い所がムります、今迄の事を考へて見ても、亦隨分威張れる事跡もムります。

天城、長田君、それは串談でムる、君は學術小説でも語る積りであらう、」

長田、小説ではムらん、確固たる歴史でムる、此事は三十五年前確かに行はれた事で、當時の新聞雜誌社會でも皆之を信仰したので、ムる、けれども爾

後幾許ならずして此説は破れてしまいました、何となれば今度は本當の學者が起つて、今迄の自稱學者、威張り學者を倒してしまい、遂に之に反して「如何なる生物も種子なくして生れるものはない」といふ事を實證確論しました、然しそれまでには随分と激しい議論も一時はムりました、其時の反對者と云ふも中々名高い者である。」

今井「それは又誰と誰の事でムるか。」  
 長田「ブシエ氏とバストール氏の事でムる、前者は之が反對で、後者は眞理の勝利者である、先づ二氏の履歴よりして、一寸申上げますれば、ブシエ氏は佛國ルエンの學者にして、此時の事柄によりて歐洲社會に随分と其名を轟かした人ですが、バストール氏は其精密なる研究を以て、大に學術界の進歩を計つた人でムる、現世紀の學者の中でも科學の發達に貢献した者は恐くは氏が第一等でムりませう、氏は一千八百二十年佛國ドールと云ふ所に生れ、一千八百九十五年巴里府に死なれた人で、其名誰知らぬ者もありません、日本人中にも其名を記して居る者は澤山ある、君杯は無論御存知の事と存する、」云々(下略)

此の如く唯物論者及び無神論者は今日寸地を削られ、明

日尺地を禡はれ、現在殆ど其立脚地を失なひ了りぬ、固より萬有は人も物も俱に極微分子てふ原子(atom)にて成り立てる者ならん、ニウトンも既に然か信ぜしに似たり、其著述に係る視學篇オプティクスに曰く、

「余想ふに神は元初に物質を堅牢なる、不透なる、而して善く轉徙する者に造りたまへり、其大小其形狀、其性質其比例等凡て之を創造せる造物の目的に適ひたる者なりき、而して是等の原子は是等を以て成立てる粗質の物體よりは千萬倍も堅密にして、消耗もせず、粉碎もせざる也、」

ニウトンまた是等の物質原子を論じて曰く、  
 「是等の物質分子は恐らくは相互に粗密の度を異にし

## 宇 宙 觀

且つ其力の強弱を異にするならん」と。  
 此等の言語たるや例の唯物的無神哲學家ルクレチウスの言語と一見殆んど符節を合するが如くなれども、是れ必ずしも物質と運動の外は何の本元的存在をも許さざる唯物論と膠漆なる者に非ず、又昔ルクレチアスが明言し、今エピキュラスの流を吸む人々が無言の中に教ふる所の無神論と必ずしも提携せる者に非ず、ニウトンの精神に於ては此原子説は決して唯物論と關係せず、物質が運動の能力を自身に具有すと云ふを許さず、又引力、電氣、光熱、感覺、動物體の任意運動等が只物質と其固有性とを以て説明し去らるべきに非るを論ず、己に然り、況やニウトンの思想に於て此原子説豈無神論と關係せんや、却て

## 有 神 觀 と 無 神 觀

彼は物質の形成を造化の所爲に歸し、斯く其一切の學理說中に於て常に造物主たる神を認めつ、創造と保存の功を之に歸せり、夫れ物質と運動の事に精しきに於てはニウトンの智に逾えたるは無し、宇宙萬體の運動を規定する所の本元勢力を發明し、之を量りて其諸法則を發見したる智力は何人にも勝りて善く勢力の構成を抽象的に理會し、且つ其行動の範圍及び模様を詳悉するを得たり、然るに此の絶大なる智力は夫の質力(force)を以て物質に倚る者とし、或は神の意行外に獨立する者とする如き思想を斷然と排斥したり、否な却つてニウトンが物質及び質力(force)の觀想は彼をして其大著を結ぶに宇宙萬物が全能靈知の神の意旨と權能に由て創造せられ保存せらるるて

ふ嚴然たる公言を以てせしめたり、ニウトンの哲學的信仰は實に左の著明なる語を以て善く言ひ顯されたり、曰く、

宇 宙 觀

此の感歎措く能はざる美麗巧妙の太陽遊星及彗星は智力權能圓滿なる造物主の智慧と統轄に由るに非れば出で來ること能はざりき、彼は世界の靈魂として、非ず、萬有の主として、宇宙を治めたまふ、彼は永遠無極全能全知なり、……彼は永遠無極てふ者其れ自身には非ず、永遠無極なる者なり、彼は永存其れ自身に非ず、空問其れ自身に非ず、彼は永存する者なり、在さざる處なき者なり、我等は只彼れの性質及び徳性に由て彼を知り奉り、又世界の絶妙なる化工及び終極の目的に由て

有 神 觀 と 無 神 觀

彼を知り奉つるのみ、我等は彼れの圓滿なるが爲に彼を感歎讚美す、我等は彼れの造化主宰たるが爲に彼を禮拜崇敬す、余等は彼れの奴婢として彼を崇拜す、夫の主宰せず攝理せず、終極の大目的を立てざるが如き神は眞の神に非ず、是れ命數のみ、萬有のみ、何時も何處も同一なるが如き盲目的必然 (Blind Necessity) なる者は斯の如き窮り無き變化の妙を發生する能はず、此森羅萬象は唯是れ夫の必存必在なる造物主の意旨中より然か開闢し來れる者なるべき而已、

斯くニウトンは一種の原子論者 (atomist) にて在り乍らも、亦純乎たる敬虔なる有神論者なりき、佛國のヘルベテオス (Helvetius) 獨逸のビヒネル (Büchner) の如き、心思粗放なる

宇 宙 觀

者に非ざれば、純然たる唯物論者、極端なる無神論者たる能はず、如何となれば、宇宙唯物論と唱ふるは、是れ少なくとも、宇宙の一半を看過し、了る者なれば也、是れ靈的現象スピリチュアルを悉く没却し畢る者なれば也、勿論唯物論者は臆斷して曰ふ、靈的現象或は生命は悉く是れ酸素、水素、炭素、窒素等の原素が相結合する裏より生じ來る作用のみ、實に獨立の體あるに非ずと、但し此點に於ては、自生論者（前に掲げたる如き）が失敗せし如く、合生論者も亦失敗をなせり、本書第十十一章中に論及せし故ハクスレー教授の失敗は即ち是なれば也、ハクスレーは海底の粘泥スライムに原生命の存在するを認むと信じ、之を遠く取り寄せ來りて種々に實驗を施し、且前記の元素等を百方結合し、以て生物を造り出さんと

有 神 觀 と 無 神 觀

試みて全然失敗し、而して遂に茲處に引きたる如き大告白を爲すに至りし者とす、ハクスレー、チンダル等が是の如く毫も負惜なくして其失敗を認識したるは、之をプシエのいつまでも未練らしく其自生説に拘着したるに比ぶれば、其男らしきや大いに讚むべき者と謂ふべし、

## 第十五章 有神觀と無神觀(承前)

凡神論萬有即神論と一元論

前章に粗描き出せし如く唯物主義と無神觀とは着々と其根據地を削り縮められたりしが、其勢力は尙侮る可らざる者あり、時々意外の點より逆襲をなし來るが故に、有神論は常に攻守の兩方に注意せざる可らず、少しく怠るや往々其占領地を奪ひ還されんとす、是に於て勇將猛卒日常警戒に油斷なし、中に就て蘇格蘭土のフリント(Plint)博士(有神論及無神哲學)、亞米利加のフシヤ教授(Fisher)の如きは、特に前頭に奮進して、世に其名を轟ろかせる者なり、此中フリント氏は、左の七點より進んで有神の證據を確立せんと

## 宇 宙 觀

## 有 神 觀 と 無 神 觀

務めたり、曰く第一章有神證の性質、要態及び區域、曰く第二章萬物は神を以て因と爲すの果、曰く第三章宇宙の秩序を以て有神の證と爲す、曰く第四章秩序を以て證とするの議論に對する異議を辯駁す、曰く第五章道德に基ふる議論——良心と歴史との證言、曰く第六章神の智仁義を否定せんとする異議を辯ず、曰く第七章先天的有神證、名にし負ふ銳利なるフリント氏は先づ獨逸近今の神哲學界に錚々噴々たるウルリチ(Dirich)の語を引きて曰く、

『神の存在を證驗するの論は嘗て哲學界と神學界とに久しく縦横闊歩したりしかども、近時に至りては、殊に韓圖(カント)の有名なる評論の世にあらはれし以來——頗る其聲價を落せり、爾後神の存在は證明せらるべき者に非ずとの説徧ねく信者と不信者との中行なはるゝに至りぬ、其甚だしきに至りては神學者輩すらも容易く此説に雷



三六四

同じ、之が徒勞を嘲り、却つて自ら謂へらく然かするは是れ其宣傳する道の爲に盡すなりと、然れども神の存在を明かにするの證驗は神を信するの根據(理由)と正に其歸趣を同うす、是唯此信念の眞根據を學理に照して論斷辨明せる者のみ、若し是の如き證驗あること無くんば、斯の如き根據も亦有ること無し、何の根據をも有せざる信念は、假令萬一有り得べきも、是正當の信念なる能はず、只是れ氣隨自造の主觀的信念(妄信)たる耳、然り、宗教上の信念にして、若し一切の實在境に抵牾し、學理に由て究定せられたる一切の事實に矛盾し、又此の如き事實に基づける宇宙說(天地成立論)に乖反するに於ては、只是れ狂心の迷妄若くは固執たる而已云々

而して自ら斷言すらく、『神(天帝)の存在に關する證驗は、要するに是れ神自身の顯現に外ならず』と、乃ち進んで曰く、  
「宇宙には此の如き神徳の顯現充ち溢れをらんも得

て知る可らず、人若し神の正義と徳政とを信するに於ては、必らず夫の疑惑と不信とを生ぜんとするが如き衆多の事物を看過し又超視するを得べし、凡そ僅少の特別なる事實に拘泥して是非の議論を立つる者、宇宙に於ける無數の顯跡の結果を一大發明に概括總合する能はざる者は、神の有無を公平に判斷するを得ず、世界に對する眞箇の敬虔なる觀察は範圍恢宏、包容濶大なる觀察たらざる可らず、唯に一部分のみならず全體を見るの目を要し、唯に分析解剖するのみにあらず調諧統合するの能力を要す、蓋し物の一部一點も、一昆蟲の目若くは一果實の核も、固に肅然として敬虔に觀視せらるゝを得ん、然れども

眞箇の敬虔なる世界觀は宇宙を全體として達觀するに在り、永遠と無極との光を以て世界を照すに在りとす、』

意ふに是また實に聖パウロが羅馬書(新約聖書中に在る)中に於て羅馬の信徒に諭したる精神に基づける者に外ならず、曰く神の榮光は其造り給ひし一切の物に顯はれて見ゆと、是なり、

斯てフリントは原因結果の大法(因果律)に由て造物主が萬有の根本たるべきを推究し、宇宙に於ける秩序及び意匠に徴して造物主の明智を測量し、終極目的の必存を揣摩しつゝ、遂に凱然として説くらく、

『所謂男女あるひは雌雄淘汰の法則は、若し果して法

## 宇 宙 觀

## 有 神 觀 と 無 神 觀

則なりとせば、是また其性質上終極目的を含む者なるや明らかかなり、即ち其目的は形と色とに美を生ぜんとするに在りとす、盲然たる物質的勢力、苦し智能の指揮を奉ずるにあらずんば、争で能く美といふが如き極めて理想的なる目的を遂行するに至らんや、

意ふに以上論じ來れる所は既に彼のダルウキン論者輩の探研および理論が毫も意匠の議論を覆へす能はざりしことを明かにするに足りなん、我は更に論歩を進めて有神論者の意匠議論に彼等が夥しき好材料を供したることを陳んと思へども、冗漫に流れんことを恐れて敢て言はず、之を究むるにダルウ

## 宇 宙 觀

キンの著書は其中に「美妙の工夫經營、奇異の適應」等を描ける快活淋漓の大文字甚だ多きが故に、神學者にとりて無價の重寶なりと謂ふべし、蘭科植物の培養にかゝはる論および食蟲植物論の如きは、之を轉じて自然神學論に化せんには、唯其合理正當の歸結を描き出して之を適用すれば足れりとす、ペーリが有名なる自然神學書今もし幾分か既に舊びしとせば、是れダルウキン及び其徒弟輩が之を駁破せしに因るに非ず、却つて彼等がペーリの議論を證明する事實を夥しく發明せしに因るなり、

其轉じて道德界に入るや、縷々良心の事を論じて後、説を爲して曰く、

## 有 神 觀 と 無 神 觀

「良心は神の名を以て號令するに當りて亦斯く正義の神を吾人に示す也、若し結果より原因に、目的の顯現より智能に溯る推度にして何處にか有効ならば、此處に有効なりと謂ふべし、而して此の推度は吾人をして良心の第一原因(創造者)は正義なる存在者なりと信ずるを得せしむ、善惡邪正義務本分等の想念に伴なひ起る諸の感情もまた同一の歸結に指<sup>び</sup>ざすを見る、功罪の感、悔恨、および自得、道德上の望および恐懼等相合して聖善なる神の存在を指示す、人は唯に諸の物と法とに連れる靈知物なるのみならず、又己が正當にして且正義なる審判主たる他の一靈知物に連なれる者なるこ

とを此等の感情は暗々裏に表示す、無神論者自身すらも、其隠匿のために密かに憂へ、或は其陰隲の爲に心に満足する時には、宛がら己れの上に位する靈知者——己が無しと否める上帝——の面前に在るが如くに哀しみ或は喜こぶなり、若し其人の靈魂の前には只無心の法則若くは没象の物性存在する而已ならんには、彼が憂悲も彼が満足も十分には解すべからず、此等兩種の感情は道德的屬性を有する一靈知者の鑒察の下に在りと其人が自ら幾分か感ずるを示す者なりとす、人々若し其惡き思想言行につきて己れ自身よりも高き者若くは己れの同儕輩よりも高き者に責任を負ふことあらずと感じたらば、有

罪の感と應報の懼とは争でか古來斯く經驗と歴史に顯はれたるが如く然りしを得んや、吾人は是非善惡の法則を破りし時に只これを破りしと感ずるのみならば、——若し法則の後に聖善なる者の存するありて、破法者は其者の震怒を和めざる可らずとの念心裏に埋伏するにあらざりせば、祈禱、懺悔、および犠焉んぞ古來斯く天下に徧ねからんや、果して法則の後に聖善なる者ある無くんば、ソフサクレスやシエークスピールの描ける如き善惡の争あに人心にあらんや、果して宇宙に神ある無くんば、神を畏るゝ心は罪惡に由てすらも喚起せらるべき謂れ無し、然るに無神論と雖も犯罪者をして——其有罪を感ず

る時に——人間の刑罰よりも倍蓰する刑罰を畏るるの念に責惱まざるゝを免かれしむる能はず吾人已れの罪惡に單に自然法の結果として附着する苦痛をば何にまれ盡く甘んじ忍ばんとする時にも——而して又其罪惡のために國家の法律若くは社會の制裁に觸るゝ懸念なしと理性に確知する時にも、(其道德性だに枯死せずんば)尙懼るゝにあらずや、否、な其最も獨なるときに最も懼るゝにあらずや、ニウマン博士(Dr. Newman)曰く、無靈物は吾人の感情を動かす能はず、感情は靈知者を待て始めて生ず、吾人良心の聲に背きたる時は責を感じずるあり、愧るあり、懼るあり、果して然らば是れ宇宙に一箇の至聖至善な

る者ありて之に吾人が責を負ひ、之が前に吾人が愧ぢ、之が刑罰を吾人が懼るゝを示す者と謂はざるを得ず、惡を爲したる時に吾人もし母を傷けたるが如き斷腸の悲歎を懷かば、——善を爲したる時に吾人もし父に褒られたるが如き快心の満足を懷かば、是れ其心裏に或る靈知者の影像を有するの證といふべくして、我等の愛心と尊敬とは之(其靈知者)にむかひて注ぎ、我等の幸福は之が莞爾たる笑顔の中に存し、之を望みて我等は焦れ、之を仰ぎて我等は訴へ、之が怒にあふて我等は苦しみ悩む也、吾人の心中における是等の感情は其の之を激發する原因として一箇の明智者を要するが如き者なり、——吾人は石に

對して感情を發せず、馬や犬の前に恥をいだかず、人爲ばかりの法律(單に人間の制定に止まれる法律)を破りたるが爲めに悔恨懊惱あるひは心鬼の責を感じず、然るに、現に吾人が見る如く、良心は此等の諸感情、慚愧、預懼、自咎等を激發す、然のみならず、又是れ他方に於ては視聽嗅觸すべき此世の物が喚起する無き深大の安心、安固の念、天命に安んずるの心、未來にかくる望等を吾人に與ふ、悪き者は追ふ者なければ、も逃ぐ、何が故に逃るや、此の恐懼は何處より來るや、悪人が獨り居るときに見る所の者、暗中に見る所の者、其心の幽室に見る所の者は是れ誰ぞや、是等の感情の原因もし此の世に屬せざるならば、是れ自然以

上なる者、すなはち神ならざる可らず、此の如く良心の現象は無上主宰の天帝——聖善にして義至り、大能にして見ざる所なく、惡を罰し淫に禍する審判者——の形を吾人の心眼に描き示す也、(Grammar of

Assent, pp. 106, 107.)

諸此の如く唯物論及び無神論は八方より攻撃せらるゝが故に、退却また退却と、頻に背進を重ねて、遂に一大堅城の中に楯籠れり、堅城とは何ぞや、曰く、凡神論是なり、ニウマン曰く、凡神論(即ち、萬有即神論)は無神論の花とし、謂つべしと、勿論凡神論には種々の別ありて存す、曰く唯物論、凡神論、曰く唯心的、凡神論、曰く多神的、凡神論、曰く一元的、凡神論、曰く空世界的、凡神論、曰く總世界的、凡神論等、是也、

宇 宙 觀

例へば、此中最後者二種を略說せんに、空、世界的、凡神論は印度の維ミ多タ哲學の如く世界を幻空と見做し、梵天(マブラ)を以て唯一の眞體と爲し、其幻空を去て梵天の眞體に還没するを大涅槃(圓寂)と稱す、此哲學に依れば天地萬物は皆梵天の體にして、其本元を去る遠きに隨ひて愈よ粗雜究まる物と成り了る者とす、然れども萬物既に悉く梵天の體なるが故に、腐鼠に生ずる蛆蟲までも盡とく神たるの滑稽を來たすを免かれず、又總、世界的、凡神論は物我萬有悉く唯一眞體の兩面發現なりと稱して、動もすれば造物主を其不可識的一元裏に吞滅し了らんとす、但し、凡神論といふ名稱も唯、物論に次で多少の不美なる點なきに非れば、今の學者は往々、一元論(monism)といふ文

有 神 觀 と 無 神 觀

字を十七世紀より復活せしめ來りて得々と之を誇稱す、此の一元論なる者は、余輩が嘗て他處に説きたりし如く、今は一千八百六十六年を以て獨逸人ヘッケル(Haeckel)の唱へ出す所と爲りたる者なれども、亦是れ二千四百年ほど古き者なりとす、如何となれば其之に似たる哲學既に夫の上古に於てエレア哲人の口に唱へられたれば也、

(註)一元論とは其性質如何なる者ぞやと尋ぬるに、是亦凡神論の如く其種類一にして足らざるを覺ゆ、余輩嚮に「一元哲學」を著はして粗之が説明を掲げたるありき、今参考の爲め開が性質を説ける一部分を茲に掲げん、餘は該書に就て見られんことを請ふ、  
先づ一元論とは何の義ぞや、其名稱の由來如何ん、  
按ずるに、宇宙萬物は唯一つの根元を有する而已と主張する學、之れを一元哲學又は一元論と稱す、唯一の根元を立る哲學の義なり、英語

宇 宙 觀

に之を Monism (佛、Monisme, 獨、Monismus) と名く、Monism といふ文字は元と第十八世紀の前半に於て始めて獨逸の哲學者 ヴォルフ Wölff の創製したる者と見ゆ、故に Monismus を以て長兄とす、但し均く名は一元論と申すとも、其性質に至りては彼此全く相異なる者あり、先づ人間的一元論 (anthropological monism) あり、神學的一元論 (theological monism) ありて、兩々相對す、又唯心的一元論 (idealistic monism) 及び唯物的一元論 (materialistic monism) の二種に大別す、又心物二者を包籠して搏て一丸と爲したる者あり、大同一元論 (philosophy of identity, Identitätsphilosophie) と稱す、

人間的一元論上に於て之を言へば、人は唯物質の凝結物のみと説く、之を唯物的一元論 (materialistic monism) と名け、又人は唯靈心の結晶物のみと説く、之を唯心的一元論 (spiritualistic, or, idealistic monism) と名く、如何となれば俱に人間活動の根元を靈心若くは物質の一に取れば也、換言すれば、一は人間活動の根元 (principle of activity) を單に虚靈な

有 神 觀 と 無 神 觀

る心の作用と臆斷し、一は人間活動の根元を單に物質の作用と推定すれば也、

更に一步を進めて之を宇宙觀世界觀等に應用する時は其義勿論大いに推擴められ來る者とす、是に於て乎神學的、哲學的、凡神的、機械的、一元論生じ來る也、ロシウス曰く、

『唯心論者にして單に靈神の實在をのみを許す徒、之を一元論者 (Monisten, monists) と稱す、斯の如く又單に物質の實在のみを許す徒、之を二元論者と號す、以て二元論者 (Dualisten, dualists) と區別す、是れ後者は二種の全く異なる物、即ち心靈と物質との兩立を許せば也、但し吾人は物の自性實體 (Dingen an sich, things in themselves, noumena) を知る能はず、單に之が現象 (Erscheinungen, appearances, phenomena) を認るのみなるが故に、彼等兩觀は——即ち一元論も、二元論も、開が學術的知識を誇るだけは、俱に毫も根據なき者と謂はざる可らず、之を要するに疑問とする所は是等二論中孰れが勝れるやと謂ふに在るに非ず、唯是等



二者の中孰れが最も哲理に適ふやと謂ふに在る也、

ロシウスが一元二元兩者を一言に罵倒せる所は勿論カ  
ントより其刺衝を得たる者とす、

下古に於て(第六世紀の半)一元的絶對的凡神論を阿蘭陀に唱へ  
出せしスピノザは猶ユデア太人なれば、夫そのが爲に同族間に痛く  
憎まれ、遂に其仲間なかの教會を放逐せられたりしが、其宣告  
文は(大西祝氏の語を借りて言へば)左の如し、

『評議役等今茲に爾等會衆に告ぐ、既に夙くよりバルフ、デ、エスピノザ  
の邪しまなる説を懷き邪しまなる行を爲すを聞き、種々の手段を盡  
し恩惠の處置を以て彼れを其の惡しき道より離れしめんと力めた  
りしに、皆徒勞に屬しぬ、嘗に然るのみならず、彼れが言行に表はす忌  
むべく惡むべき邪説と非道とは却て日々其の甚しきを加ふと聞き  
ぬ、是れに就きては彼れエスピノザの面前に於て證を立て、彼れをし

## 宇 宙 觀

て口を箝ましめたる多くの證人あり、因りて、ラビの人達と共に總べ  
て此等の事件を審問し、其人達の承認を得て茲に右云ふエスピノザ  
を、イスラエルの民より除き去るに決定し、次に掲ぐる詛の辭を以て  
彼れを放逐するもの也、

我等は今天の使の判定に従ひ、聖者の決斷に従ひ、神の大御許を得、此  
の聖き會衆の承認を得て、茲に、トールの書即ち六百十三個條の律法  
の記しある聖き書の前にありてバルフ、デ、エスピノザを見棄て、逐ひ  
拂ひ、詛ふ、ヨシアがエリコを詛ひし詛を以て、エリザが彼の若者を詛  
ひし詛を以て、律法に記しある諸の詛を以て彼を詛ふ、晝も夜も彼は  
詛れてあれ、彼が眠れる時も彼が目覺る時も詛れてあれ、彼が家を出  
る時も彼が家に入る時も詛れてあれ、願ふ主は彼を永劫宥し給はざ  
らんことを、律法の書に記されし諸の詛を以て詛れし彼に向つて、主  
は必ず怒りと憤りとを燃やし給ふべし、主は天の下、彼れの名を抹殺  
し去り、律法の書に載せられたる穹蒼の詛を以て彼を、イスラエルの

## 有 神 觀 と 無 神 觀

民より断ち離し、彼を其の亡びに陥らしめ給ふべし。

然るに爾等固く爾等の主なる神を信する者は皆安かれ、皆榮えよ、誰も語ばを以て文を以て彼に交る勿れ、誰も彼に恩恵を施す勿れ、誰も彼と同じ屋下に立つ勿れ、誰も六尺以内彼に近づく勿れ、誰も彼れの著す書を読む勿れ、』

宇 宙 観

現。今。一。元。論。の。主。唱。者。ヘッケルは、殆んど極端にして、毫も宇  
宙に終極目的あるを認めず、絶対的なる機械的進化法を、  
以て一切の現象を説明し盡くさんと試む、故にヘッケルの  
手に在りてや、一元論は機械主義となり、機械的一元論(Mechanischer Monismus)の名此に於てか起れり、然れども一切の  
進化に毫も目的又は目標なしと唱ふるは、是れ天地萬物  
の化醇法に戻る者にして、進化といふ文字の意義と全く  
相反對するを奈何せん乎、無限絶大なる天地萬物が互に

有 神 観 と 無 神 観

相。助。け。相。待。ち。て。駁。々。と。化。醇。し。來。り。た。る。者。は。絶。鴻。絶。妙。の  
目的を有する至極の證驗に非ずや、若し是にして目的な  
しとせば、宇内何物か目的ある者あらんや、是れ情理に反  
するの癡言にして、假にも理性を有する人の口にすべき  
者に非ず、然るに博識雄才ヘッケルの如き學者にして、靦然  
之を主張す、奇怪千萬と謂はざる可らず、然れども實は是  
れ全く先入主義の犠牲となりし者なる而已、  
次に又一切の現象を徹頭徹尾機械的作用と解き去らんと  
務むる如きも亦(次章に余輩が説かんとする如く)正當  
の論法に非ず、ヘッケル教授は、一切の心的現象を無視し了  
れる者に似たり、心理學と物理學とを混同し了れり、彼が  
同國人たる大家フエヒネル、等断じて之を容さじ、カント

宇 宙 觀

が腦漿の變化は決して該大哲學者の純理批判論と同一なる者に非ず、莊子が毛筆の動けるは決して夫の大鵬大鯤的なる奇絶妙絶の觀念と同じき者に非ず、腦漿の損耗、五指の運動は賢愚之を均うす、基督曰く「シーザルの所屬はシーザルに納め、天帝の所屬は天帝に納むべし」と、余輩は敢て言はんとす——機械的現象は機械的に之を解説せよ、靈神的現象は心理的に之を解説せよ、但しヘッテルは只當時の學術と知識とに隨がひて、此等の件々を實は單に假定説とし、臆説として提出したる而已、之を過信するは勿論其妄信家の罪のみ、ヘッテルの罪に非ず、然ればヘッテルは凡そ今より十餘年前其絶筆として『學術界の謎語』と題する立派なる一書を著はし、之を生前の

有 神 觀 と 無 神 觀

形見として世に遺しぬ、其序言中に彼は己れの覺悟を述べて曰く、『我は十九世紀の産兒なり、今や十九世紀は終りに垂んとすれば、我は茲に吾が事業に終を告しめ、其今まで究め得たる所を一括して之を後代に問んと欲す』と、其之を學術界の『謎語』と名けたるは甚だ善し、亦是れ上に引きたるレイモン博士の所謂『世界七謎』の好例に則とれる、者歟非耶、或る一元論者はまた物質的運動と精神的感情とを同一物の兩面なりと言ひて、強ひて無神的一元論を成立せしめんと計りつゝあり、然し乍ら(次章に説かん如く)是また物理を覆へすに非ざれば到底證明され能はざらんこと正にフイスク氏が告白せる如し、米國の大理學家フキス

宇 宙 觀

ク(Eisk)氏はスペンサルの准弟子ながらも、此點に於ては固く科學上の定理を持して曰く(ダウウヰン論を見よ)『運動感情を生ずと云ふは、熱氣が光明を生ずと云ふと同意義なる乎、運動の若干量は變じて感情の之ニと同一なる若干量と化し得るか、否な決して然らず、神經の運動は其消滅するに當てや只體中の種々なる部分に於ける他の諸神經運動に配分せられ去るのみ、而して是等の諸神經運動は又種々に變化して、或は筋肉に於る收縮の運動となり、或は肉核に於る分泌の運動となり、或は身體組織上に於ける同化の運動となり、或は其他の神經運動と成る也。：：勢力互換の法則にして若し生物の身内に行なはるる所の物質的運動に適用せら

有 神 觀 と 無 神 觀

るとせば、吾人は分量上より量られ得べき運動の法則に照して之をも論ぜざるを得ず、故に感情の如く分量上量られ能はぬ作用を一たび物質的運動の範圍内に引入れよ、然らば所謂勢力の互換は最早確立し能はじ、只是れ非理と矛盾との中に一直線に奔り入る者のみ、果して然せんには、勢力の互換を論ずるに當りてや、最下等の物質的化學的運動より最上等の神經運動に至るまで、凡て之が全領分は悉く物質的名辭を以て物質的運動として記述せざる可らざらん、而して感情とか意識とか云ふが如き者は全たく亡失し了らん！  
斯の如く如法に推究め來るや、唯物論(ルビネ)は申すに及ばず、一元論の如きすらも、其無神的なる以上は、存立する